人民群書

363
N218z

自由主義·民主主義
社會主義·共產主義

永田廣志著

東京 伊藤書店刊 1948

0034588000

0034588-000

363－N218z

自由主義・民主主義・社会主義
・共産主義

永田広志・著

伊藤書店

1948 4版

AGC

自由主義・民主主義
社會主義・共產主義

永田廣志著

伊藤書店刊
1948・東京

363
N218z

国立国会
36.2.11
図書館

540849

はしがき

本書の表題は「人民群書」編輯部から與へられたものである。しかし、自由主義とか社會主義とかいふものについて、その種々の主張や學說を單に解說すること、またその理論的批判を與へることが筆者の主要任務ではない。もちろん啓蒙的小冊子であつてみれば、それらの「主義」の理論的內容について大體の概念を與へることは必要であるが、一層大事なことは、そうした思潮の發生、發展の歷史的、階級的背景や、その歷史的、階級的役割について明確を期することである。この觀點から、本書においては、近代の社會運動、政治鬪爭の指導觀念となつた、また現に指導觀念として生きてゐる、主要な思潮が、近代史との聯關において叙述されるであらう。しかしながら本書において歷史的過去に關して述べてゐる部分（第一章、第二章、第四章）は重要でなく、特に重點がおかれてゐるのは第三章と第五章であり、この二つの章と第七章を理解してもらへれば本書の目的は達せられたと云へよう。

一九四六年二月

著　者

目次

はしがき …… 一
第一章　初期資本主義のイデオロギー …… 三―三
1　ヒューマニズム …… 三
2　自由思想 …… 七
第二章　自由主義・民主主義の形成 …… 一三―二三
1　イギリスの自由主義 …… 一三
2　ルソーの民主主義 …… 二〇
第三章　自由主義と民主主義の階級的基礎 …… 二五―二九
1　政治的流派としての自由主義と民主主義 …… 二四
2　國家形態としてのブルジョア民主主義とプロレタリア民主主義 …… 三一
第四章　マルクス前の社會主義 …… 四〇―五三
1　空想的社會主義 …… 四〇

2　小ブルジョア的社會主義……四八
第五章　共産主義＝科學的社會主義……五六―七四
1　共産主義發生の歴史的條件……五四
2　共産主義理論の基礎……六一
3　レーニン主義……七一
第六章　現代の社會主義……七五―八三
1　現代社會主義の階級的基礎……七五
2　現代社會主義の諸流派……七九
第七章　日本における自由主義、社會主義、共産主義……八四―九〇
1　日本資本主義とブルジョアジー・地主……八七
2　民主主義の諸勢力……八七

第一章　初期資本主義のイデオロギー

1　ヒューマニズム

普通、自由主義、民主主義、社會主義等の歴史を語る場合には、遠く古代にさかのぼり、時には、古代支那までが回顧される。古代ギリシアやローマの民主主義、プラトンの「社會主義」、老子の「無政府主義」等を云爲するのがその類ひである。しかしそれは自由主義や社會主義が近代社會において形成された後、それに何らか類したものを過去に求める場合に問題となるにすぎない。自由主義や社會主義は古代の思想や制度から大なり小なり示唆される所があつたとしても、元來近代資本主義の發展の一定段階の必然的所産として、思想内容の上でも古代思想と截然と區別される根本原理を有してゐる。それは卽ちヒューマニズムである。生ける道具としての奴隷の搾取に立脚してゐた古代社會では「民主主義」も「社會主義」も奴隷主＝自由民の間だけのものであり、古代人にはすべての人間の尊貴に關する思想が缺けてゐた。然るに封建的支配の下からのすべての被抑壓人民の解放に利益を有した勃興期のブルジョアジーは、すべての人間の自由、すべての市民の自然的權利の名において戰ふべき歴史的地位に置かれてゐたから、ヒューマニズム（人間主義、倫理的には人道主義）の思想がそ

の原則として準備されたことは偶然でない。吾々はいまこのヒューマニズムが如何にして形成されたかを概觀しよう。

ヨーロッパにおける封建的中世の末期、即ち十四＝五世紀前後はルネサンス時代と呼ばれてゐる。それは先づ商業資本の最、早期に發達したイタリーの都市において、文藝（領域でダンテ（一二六五＝一三二一）、ペトラルカ（一三〇四＝七四）、ボッカチオ（一三一三＝七五）によつて始められ、次いでその典型的な天才、技術家・發明家・藝術家レオナルド・ダヴィンチ（一四五二＝一五一九）やラファエロ（一四八三＝一五二〇）、ミケランヂェロ（一四七五＝一五六四）等の如き卓出した藝術家を出した。

思想的には古代文化の復興と考へられたルネサンス運動は、中世神學の完成たるスコラ哲學に對抗して古代への復歸の主張となつて現はれ、從つて言語學＝文獻學がその方法的武器であつた。これは十五世紀にヒューマニストと呼ばれた學者達によつて始められた。古代への親炙はプラトン哲學や、スコラ學から淨められた本來のアリストテレス哲學やの復興をもたらしたが、初めの間は特筆すべき學說は生れなかつた。しかしながらここで問題なのは言語學や古文獻の註釋ではなくて、敎會的權威の桎梏からの學問の解放の動向であり、古代哲學に見られる如き人間理性の權威の恢復といふことである。敎會の支配下からの人間理性のこの解放の動向は、イタリー都市に見られる如く、封建的統制が崩壞して個人の自由が確保されたことを社會的＝歷史的基礎に持つと共に、手工業技術や都市生活

の發達によつて提起された自然認識の要求つ豫感でもあつた。發展する自然認識は人間理性の光によつて獲得されなければならない。かくして歷史記述においても藝術においても人間中心主義であつたルネサンスは、同時に天上から自然への關心の轉換をも意味した。「中世は自然の美を認めなかつた」と美術史家ウェルフリンは云ひ、「近代自然科學はヒューマニズムの娘である」と哲學史家ヴィンデルバンドは斷定してゐる。

ルネサンス思想のかやうな傾向はニコラウス・クーザヌス（一四〇一＝六四）にすでに示されてゐる。神と合一するに至る迄の人間の「無限なる認識」の可能性を信じた彼は、自然認識の問題に強く關心し、數學、物理學をも考究し、地球の自轉を說いた。人工の本よりも神與へた自然の書を讀めといふ彼の思想は十六世紀のドイツに強く影響し、哲學の唯一の對象は自然認識であるとするパラケルスス（一四九三＝一五四一）の如き醫師・化學者やコペルニクス（一四七三＝一五四三）の如き地動說の創唱者が出た。

更に自然への關心、集中はイタリーにおいて數學者カルダノ（一五〇一＝七六）やテレジオ（一五〇八＝八八）の自然哲學を產んだ。それはクーザヌスにも見られる汎神論的傾向を特徵としており、汎神論はジョルダーノ・ブルーノ（一五四八＝一六〇〇）において大成された。この哲學は、人間理性の無限な力を信ずると共に、人間と自然の上に立つ超越神を否定し、神を世界に內在するものと見る點に、人間主義と自然認識への關心集中とを反映してゐる。かくて傳統的權威の否定と經驗的研究

との精神に貫かれたベーコン（一五六一＝一六二六）の哲學やガリレイ（一五六四＝一六四二）の物理學は、ルネサンスの精神の結實であることがわかる。

かくしてルネサンスのヒューマニズムは、人間の高貴性、個人の自主性の觀念を基調としてゐる點で、所謂キリスト教的ヒューマニズム（人類愛といふ如き意味の）とは異り、個人主義、自由主義への萌芽を含むと同時に、民主主義や社會主義の中にも生かされうるものであり、それはすべての近代思想の共同の素地をなすものである。人間は人間にとつて最高の存在であるといふヒューマニズムの思想は、すべての合理的な社會生活に含まれなければならない。その人間尊重の思想はやがて專制に對する人民の權利の主張（民主々義）、社會的不公正の是正の要求（空想的社會主義）となつて現はれた。

最後に、ルネサンスのヒューマニズムがトーマス・モーア（一八四〇＝一五三五——刑死）の「ユートピア」において、社會思想として顯現してゐることに注意しなければならない。十六世紀以來初期資本主義の段階に、卽ち資本主義のマニュファクチュア的段階に入つたイギリスでは、資本の原始的蓄積の端初を成した土地圍ひ込み（地主＝貴族の農民放逐による耕地の牧場化）は十五世紀末から强行され、「羊が人間を喰ふ」といふ悲慘な狀態が出現した。土地から「解放」されたかかる農民の窮狀を目擊したモーアは、害惡の根源を私有財產制に見出し、一種の共產主義社會を空想した。それは後の社會主義思想に大きく影響したが、プロレタリアートとブルジョアジーの階級分化の事實に立脚する後世の空想的社會主義とはおのづから歷史的意義を異にし、何ら實踐的影響を持たなかつた。しかしながら初期資本主義のイデオロギーとしてのヒューマニズムがかやうな社會主義、共產主義の先驅者を產んだことは注目されなければならない。

2 自由思想

スコラ神學に對するヒューマニストの批判は、客觀的には、封建制の聖化者でありまたそれ自身封建領主、大搾取者であつたローマカトリック教會の權威の否定であり、これに對する鬪爭のイデオロギー的準備であつた。信仰を權威に基かせずに、自主的な人間理性に基かせようとする傾向は、周知の如く、十六世紀に宗教改革を產んだ。ルネサンスが封建的關係の著しく崩壞したイタリー諸都市において藝術および科學の領域において積極的な實を結んだとき、封建領主およびローマ教會の支配と發展途上の商業資本との矛盾に惱まされた中部ヨーロッパでは、ヒューマニズムはローマ教會への鬪爭となつて發現した。この鬪爭は封建的支配に對する農民および都市下層民の鬪爭のイデオロギー的形式であつた。ボヘミアでは宗教改革家フス（一三六五＝一四一五）の刑死の翌年から一四三一年までに彼の宗派は五回に亙つてローマ教會および皇帝の支配に對して反亂した。ルーテル（一四八三＝一五四六）の宗教改革はドイツにおいて開始されつつあつた農民戰爭（封建領主およびローマ教會に對する農民の反亂）の環境の中で行はれた。ルーテル自身はドイツにおけるローマ教會の勢力の驅逐に

利益を有する諸侯および都市貴族のイデオローグとして、諸侯に對する農民の闘爭が激化したとき、農民に對する最初の同情を捨て、これが鎮壓を叫んだが、より急進的な再洗派の代表者ミュンツェル（一四九〇＝一五二五――刑死）は領主なき「神の國」の實現の名において農民戰爭の指導者となつた。彼にとつては信仰は全く理性の事柄であつて、理性の前には何らの權威も認められなかつた。ドイツ農民戰爭の鎮壓後、オランダにも都市平民＝再洗派の蜂起が企てられ、ミュンステルは一時彼等の手に落ちたことがある。

教會に對するこのやうな闘爭が、勃興しつつあつた自然科學と結びつくとき、唯物論、無神論が出てくるのは必然である。先づイギリスにおいてベーコンの經驗論はホッブス（一五八八＝一六七九）において明確な唯物論に發展した。彼の哲學は典型的な機械的唯物論であつて、その機械的自然觀は著しくガリレイの力學に依據してゐる。彼は宗教については、多神教の神々は無知と恐怖の所產であり、キリスト教的唯一神は「原動者」（最初の原因）の觀念として產まれると說明し、神については「吾々は單に彼があるといふこと以外には彼が何であるかを知らない」といふ立場から、神の名による地上の支配を否定し、ローマ教會を「暗黑の王國」として攻擊し、國家への宗教の完全な從屬を主張した。かやうにホッブスにおいては唯物論が未だ宗教の否定に到達しなかつたのは、彼が絕對主權の辯明者であつて、革命的人民のイデオローグでなかつたことに關聯してゐる。爾後イギリスの唯物論は大抵、そのブルジョアジーの妥協的性格を反映して、不可知論のいちぢくの葉で隱蔽された。

十七世紀にはマニュファクチュアおよび商業の繁榮期に達してゐたオランダにおいては、宗教批判は一層鋭い無神論的傾向を取つた。すでにホッブスに見られるバイブルの批評的研究はオランダの哲學者スピノーザ（一六三二＝七七）において確固たるものとなつた。自然はそれ自身の中に原因を有し、永遠的であると云ふ者は、神の存在を否定する者である、とはホッブスの道破したところであるが、スピノーザにあつては神とは正に自然の別名に外ならず、自然はそれ自身の原因（カウサ・スイ――自因）による永遠の存在である。汎神論的蓋被の下にあるこの無神論的本質は、彼が啓示＝豫言は「想像力」によつて「知覺」されるものであつて、その確實性は數學的でなく（デカルトの機械的自然觀を受け繼いだスピノーザにあつては數學的、特に幾何學的方法に基く知識が最も確實なものとされた）道德的のものにすぎず、豫言はそれ自身の中に確實性を含む「自然的知識」に劣るものであると主張し、「自然的知識」としての哲學を神學から分離せねばならぬと云ふとき、明瞭に露出してゐる。舊教會の神學に對して新神學を以つて戰つた宗教改革家と異つて、神學からの哲學の獨立を宣言し、バイブル批判を開始したスピノーザは、これによつて近代自由思想の創唱者と見做されてゐる。

彼にとつては傳統的の信仰とは「輕信性と偏見」に外ならず、人間がその「自由な思惟」を使用して眞僞を區別するのを妨げ、「悟性の光」を消すものに外ならなかつた。彼によれば、神を信ずることは自身の內的信念に基くべきであり、思想の自由は國家によつて市民に保證さるべき最も貴重な財でなければならない。絕對的主權者の發する法律が市民の良心となり善惡の判斷の基準とならねばなら

ぬと考へたホッブスは、その哲學の唯物論的性格にもかかはらず、自身の良心に反する行爲は罪惡であるとか、各私人は善惡の審判者であるとかといふ原則は社會にとつて有害であると主張し、思想や信教の自由、自由思想を認めなかつた。然るにスピノーザがこれを主張しえたのは、當時●オランダは未だ革命の過程にあつたイギリスと異つてすでにブルジョア國家であり、そこでは思想の自由が保證されてゐた、といふ事情から理解さるべきである。後にフランスの多くの革命的な書物はオランダで出版された。

ここでついでに、自由思想（英語の freethinking ドイツ語の Freidenkertum）と思想の自由の區別について一言しておくのも無駄ではないだらう。といふのは、今日本では民主主義、自由主義なる語が氾濫してゐて、その間に誤用も見られ、思想の自由の主張をその一要素に有する自由主義（リベラリズム）思想が往々自由思想と呼ばれてゐるからである。教權、神學から自由な思想としての自由思想は、現代では無神論の同義語であり、ヨーロッパ諸國の無神者團體には自由思想家同盟と名乘つてゐるものが多い。自由思想は思想の自由と共に確立され、不可分な聯關にあることはもちろんであるが、個人の政治的自由や經濟的自由と並んで自由主義の內容を成してゐる思想の自由は、未だ必ずしも宗教批判＝無神論ではなく、同時にまた宗教主張の自由をも含むものである。しかしながら、近代自由思想は封建的宗教からの人間の解放を意味するものとして、封建制度からの人間の現實的解放を意味する自由主義の重要なイデオロギー的反映であつた。

スピノーザの時代に續いて所謂啓蒙の時代が始まり、傳統的信仰に代へるに自由な理性を以つてしようとする傾向はその頂點に達した。それはイギリスでは理神論の形をとつてあらはれた。理神論は自然宗教又は理性宗教とも呼ばれ、世界の外在的創造者たる神は創造後には世界に干涉せず、世界をそれ自身の自由に放任するといふ思想をもつて特徵づけられるものである（「原動者」に關するニュートンの觀念も理神論的である）。それは神の名による封建的束縛を「自然の光」（理性）の名において打破しようとするブルジョアジーの氣分の表現であつた。

理神論から一歩進んで、「原動者」たる神を排除し、世界＝神は永遠であり自己運動すると主張して汎神論的無神論の立場に立つたのはトーランド（一六七〇＝一七二一）である。彼は、神は理性の創造物であるとし、キリスト教そのものを批判したコリンス（一六七六＝一七二九）と共に、イギリスにおける自由思想の代表者である。

封建的＝絕對主義的支配に對する鬪爭が尖銳な形態をとり、遂に大革命となつて爆發したフランスでは、モンテスキュー（一六八九＝一七五五）とヴォルテール（一六九四＝一七七八）によつて廣汎に展開された啓蒙は、ラメトリー（一七〇九＝一七五一）、ドルバック（一七二三＝八九）、ディドロー（一七一三＝八四）の如き戰鬪的唯物論者を輩出させた。彼等の唯物論は機械的唯物論であつて、力學を模型とした自然說明、發達、進化の觀念の缺如といふ點で當時の自然科學の狀態によつて制約されており、社會に關しては歷史の客觀的發達過程を把握せず思想の支配を信じた點で觀念論的であ

つたとはいへ、宗教一般および教會に對する鬪爭において仕上げられたその哲學は、もはや汎神論、理神論、不可知論等の隱蔽物なき唯物論であつた。彼等にあつては物質世界は自因によつて存在し、神や宗教は無知と恐怖が生んだ偏見に外ならず、支配者や僧侶が自己の利益のために人民のこの偏見を利用し培養するのである。このやうにして近代自由思想は十八世紀のフランスにおいてその發展の絶頂に達した。フランスの唯物論はルソー（一七一二＝一七七八）の政治學說と共に大革命への思想的準備であつた。」

第二章　自由主義・民主主義の形成

1　イギリスの自由主義

さきに吾々は近代生活の一般思想史的背景を瞥見した。この背景なしには政治思想も社會思想も正しく理解することはできない。

ヒューマニズム、人間主義の思想においては、社會秩序や國家制度も神の掟ではなく、人間の自然に基くもの、人間の意志によつて定められたものでなければならない。ここから自然法や社會契約に關する觀念が生れてくる。自然法の觀念は中世スコラ學の完成者トーマス・アキヌス（一二二五＝七四）にも見られるとはいへ、彼においてはそれは神の法に從屬すべきものであつた。近代においては神の法と並んで人間の契約に基く自然法の獨自な存在權を認めたグロチウス（一五八三＝一六四五、國際法の創始者）が自然法說の先驅者と見なされてゐる。

契約說は主權を神授とせず、人民の意志、人性の自然に發するものとする點で自然法說と不可分であることは明白である。この人民主權の思想は、フランスのボーダン（一五三〇＝九六）やドイツ人アルトゥス（一五五七＝一六三八）において基礎をおかれた。しかし當時の事情に制約されて、ボー

ダンは、人民は契約によつて權力を國王に讓渡したのであるから、後者の絶對權力に服從すべきであると考へ、アルトゥスは主權は君主に對抗する封建的「諸身分」の中に存するものと考へた。

契約說の一層詳細な展開はホッブスに見出される。ホッブスによれば人間は相互に狼であり、人間の「自然權」は自身の自然、卽ち自身の生命の保存のために自己の欲するがままに力を行使するの自由に外ならないから、人類の自然狀態は「萬人に對する萬人の戰ひ」である。だがこの狀態は却つて人間の自己保存に役立たないから、人間は理性に基いて、各人が平和裡に自己保存を確保しうる一般的規則を發見する。これが「自然法」であり、それの遵守は契約、協定を要する。ところで相互の契約不履行に對する怖れをなくすためには、共同の權力を設定し、この權力による强制の發動を可能ならしめなければならない。かかる共同の權力は、萬人が自己のすべての權利を「一人又は人々の集會」に委讓し、共同の平和と安全の問題に關してはこの後者の意志を自己の意志として認めるときに樹立される。かやうにして「一人又は人々の集會」は共同權力の擔ひ手として一つの「人格」であつて、各人はこれに服從すべく契約したのであるとはいへ、この「人格」＝國家はもはや人民に服從すべきものではない。

このやうにホッブスにあつては國家は人間の自然權に發する自然法と社會契約に基いて樹立されるとはいへ、ボーダンの場合と同じく、一度び樹立されれば絶對的なものとなり、人民に對して義務を有しない。ホッブスのこの理論は當時イギリスにおいて相戰つた二つの黨派の何れにも、卽ち封建貴

族を代表する國王の專制にも、ブルジョアジーを代表するクロムウェルの獨裁にも適合するやうに構成されたものである。

だが契約說からは、政府が人民の契約の本來の目的たる彼等の自己保存、安全を保證しないときには、政府は顚覆されねばならぬといふ結論が出てくることは容易である。その意味で契約說は革命の辯護論であり、國家權力の絶對性は契約說によつて基礎づけらるべきでなく、寧ろ權力は制限されたもの、人民に對して責任を持つものと考へられるのが自然である。だから主權の絶對性の擁護のためにフィルマー（一六〇四＝一六五三）は神授說を主張し、彼を反駁したロック（一六三二＝一七〇四）は契約說から出發して近代自由主義の創唱者となつた。ロックが「二つの政府論」（一六九〇）を出したときには、彼がそのイデオローグであつたところのイギリスのブルジョアジーは、「名譽革命」（一六八八）によつてブルジョア化しつつあつた貴族と共に權力の構成要素を成してゐたのである。

ロックの學說の基礎を成すものは人間の獨立、自由に關する思想である。人間は生れるや自由であり、權利において平等である。人類の自然的狀態においては人間は政府を知らず、たゞ道德律のみが支配する。各人は道德律への違犯者、權利の侵害者を罰する權利を有するけれども、人々は道德律のよりよき支配のために「社會契約」によつて政府を樹立する。政府はロックにあつてはもはやホッブスの場合の如く無制限でなく、その任務は市民の平等な自然權（生命、自由、財產）を保護することにあり、人民が政府に對して義務を負ふのみでなく、政府も人民に對して義務を有し、政府權力は相

應する機關によつて是正されうる。

かくしてロックにあつては人間の自然權はもはや國家に委讓することのできぬものであり、國家といへどもこれを侵害してはならない。

財産權に關するロックの自由主義的主張は、富は勞働の所産である、といふ見解に基いてゐる。彼の時代にはブルジョアジーとプロレタリアートの對立は意識せられず、ブルジョアの富もその勤勞の所産と考へられ、搾取の結果とは考へられなかつたのである。

ロックは宗教についても自由を主張し、「宗教のすべての生命と力は精神の內的にして完全な領承にある」と考へ、教會は各人の自由意志に基く團體たるべきであると主張し、他の場合と同じく宗教に關しても國家の個人への干涉主義を斥けた。しかし彼はローマカトリック教會と無神論者は信教自由の原則から除外さるべきものと考へた。前者は民族國家にとつて有害であり、後者は社會契約や一般に道德律による義務付けが依據するところの神意を無視するものだからだといふのである。

なほロックは、ベーコン、ホッブスと續くイギリス經驗論の古典的代表者であり、理神論も、バークリ（一六八五―一七五三）の主觀的觀念論も、ヒューム（一七一一―一七七六）の懷疑論もロックの經驗論に發し、他方この經驗論はフランスの唯物論、特にコンヂヤック（一七一五―一七八〇）やエルヴェシウス（一七一五―一七七一）の感覺論にも著しく影響したといふことを附言しておく。

ロックが政治の領域において確立した自由主義を經濟の領域において全幅的に基礎づけたのはスミス（一七二三―一七九〇）である。ロックは經濟に關しては未だ、資本が主としてマニュファクチュア的生產に基礎を置く商業資本として重要な役割を演じた時代の重商主義（マーカンチリズム）の立場を脫せず、貿易への國家の干涉の必要を認めた。自由貿易論はスミスに少なからず影響したと云はれるフランスのフィヂオクラート學派（および哲學者ヒューム）によつても主張された。だがスミスは、フィヂオクラート（重農主義者）が富の源泉を農業と考へたのに對して、勞働一般を富の源泉と考へ、個人の自由な經濟活動が同時に社會的福祉の增進に役立つと主張した點において、この自由主義ブルジョア的性格を明確に示してゐる。

スミスによれば、人間の經濟活動の動機は「現在の享樂への欲情」と「吾々の狀態を改善せんとする欲望」であり、この後者だけでも、自由且つ安全に働くことを許されるならば、「單に社會を富と榮に向つて進めうるのみでなく、人間の法律の愚劣がそれによつて餘りにも屢々社會の運行を妨げてゐるところの百もの不適當な障碍を克服しうる强力な原理」である。この原理は田舍人にあつては驚揚さや怠惰のために弱められてゐるのに反し、商人や工業家においては特に著しく顯現する。

このやうにスミスにあつては個人の利己的欲望は社會的福祉と一致し、私益と公益の間には自然的一致が存する。從つて政府の干涉は「自然的秩序」、「富裕の自然的進步」に反するものとして斥けられる。かくしてスミスにあつてはブルジョア的致富衝動は人間の自然（人性）に外ならず、これが無條件的に經濟生活の基本原理を成すものである。

ロックが政治學において、スミスが經濟學において樹立した自由主義は、ベンサム（一七四八＝一八三二）およびJ・S・ミル（一八〇六＝七三）の功利主義において倫理學的辯明を見出した。ベンサムによれば、社會とは個人の集合によつて構成される「擬制的全體」であり、社會の利益は「それを構成する個々人の利益の總體」に外ならず、個人の利益とは「その人の快樂の總高を增す」こと、又は少なくとも「その人の苦痛の總高を減ずる」ことに外ならない。ここからして道德および立法の規準として「最大多數の最大幸福」（快樂）といふ原理が出てくる。ベンサムにあつては快樂には量的差別（强度、持續等）しか認められなかつたのに對して、ミルにあつては質的差別が認められ、滿足せる愚者よりも不滿足なソクラテスの方が幸福であるとされ、「下等な快樂」に對する「高等な快樂」の優位が說かれてゐる。だが何れにしても、個人の快樂、利益の追求に道德的辯明を與へてゐる點で兩者は同樣である。功利主義は自由主義の思想的根據をなしてゐるブルジョア個人主義の倫理學に外ならない。

その論理學において經驗論的方法論を完成し、倫理學において功利主義を改良したミルは、政治論においては個人も社會も「自衞」の必要の場合にしか人々の「行動の自由」に干涉してはならないといふ自由主義の原則から出發し、經濟學においてはスミス以來のブルジョア經濟學を大成（同時に俗流化）した。ミルは自由主義經濟學（所謂マンチェスター學派）の代表者として自由放任（レッセ・フェール）の原則を固執したとはいへ、すでに彼の時代にはブルジョアジーとプロレタリアートの對立、鬪爭は明白な事實であつたから、彼はこの鬪爭を避けんがために分配制度に改良を加へるべき可能性を認めた。

何れにしてもミルはあらゆる點においてイギリスの古典的ブルジョア・イデオロギーの最大の代表者であり、ブルジョア思想の進步性はすでに彼において限界に達してゐる。

進化論哲學者スペンサー（一八二〇＝一九〇三）は社會の進化論的考察（それによれば社會は「武人」型から「產業」型へ——即ち資本主義へ——進化する）に基いて功利主義、自由主義を基礎づけたが、彼にあつてはこのブルジョア思想の反動性は、社會主義を以つて「最も鋭い形の軍事的專制主義」に終るものとし、「世界が嘗て經驗した最大の不幸」と見なしてゐる事實の中に判然と露出してゐる。

以上の如く、自由主義は封建制に對するブルジョアジーの鬪爭において發生し、この階級の生長につれて理論的にも成熟したが、プロレタリアートがブルジョアジーの主要な敵として現はれるに至つた十九世紀中葉以後にはその進步性を失ひ、次第に反動性を帶びてきた。

一方、自由主義經濟がよつて立つ自由競爭から（弱肉强食の結果）獨占が生れ、自由競爭の地盤の上で獨占金融資本が支配し、他方、プロレタリアートの資本に對する抗爭が激化した帝國主義＝獨占資本主義の段階においては、ブルジョアジーの反動化は確定的となり、その自由主義は或は反動的に變色するか、或はその自由主義的分派は無力となつた。特に第一次帝國主義戰爭以來、資本主義の一般的危機が始まると共に、この危機が特に鋭く經驗された資本主義諸國（ドイツ、日本、イタリー、スペイン等）ではブルジョア的反動性はファシズムの形態、即ち、ブルジョア獨裁の露骨なる血腥い形態をとつたことは周知の通りである。これらのファシスト帝國主義國の侵略に對する「民主主義諸

國」の闘爭は、中國の民主主義的民族解放闘爭、ソヴェート同盟の防衛の如き進歩的要因を内包するものとして、世界勤勞大衆の支持と壓力の下に遂行された進歩的意義ある戰爭であつたことを認めなければならない。

2　ルソーの民主主義

イギリスに次いで資本主義が成長しつつあつたフランスでは、ルネサンス自然哲學の餘效はガッサンヂ（一五九二＝一六五五）による古代原子論的自然觀の復活の試みを生み、次いで近代思想は傳統から自由な人間の思惟から出發しようと企てたデカルト（一五九六＝一六五〇）の合理主義哲學を生んだ。デカルトが一方に機械的自然觀を唱へながらも他方、生得觀念としての神の存在の承認によつて宗教と妥協したとすれば、ベイル（一六四七＝一七〇六）はすでに懐疑論の立場から科學と宗教、理性と啓示の矛盾を鋭く剔抉した。宗教に對して懐疑的であつた彼は、思想の完全な自由を主張し、無神論者も尊敬すべき人間でありうること、無神論者の社會がありうべきことを認め、ロックと異つて思想、信教の自由の原則から無神論者を除外する何らの理由をも見出さなかつた。

ベイルに次いでモンテスキュー（前出）は政治の領域においてイギリス流の自由主義の宣傳によつて啓蒙を力強く展開した。彼の主著「法の精神」は明治初年に邦譯され（「萬法精理」）、その三權分立論は廣く知られてゐるが、それは自由主義の立場からイギリス式立憲主義を謳歌したものであつた。

モンテスキューよりも廣汎な影響力を持つたのはヴォルテール（前出）であつた。彼もイギリス思想（ニュートンの自然觀、ロックの哲學、理神論）のフランスへの普及に多大の力を致すと共に、理神論的見地から狂信および既成教會と激しく戰つた。僧侶主義に對するこの闘爭はディドロー（前出）を先頭とする百科全書派の唯物論者によつて一層徹底させられた。フランスにおける宗教批判がかやうな尖鋭な形態をとつたことについては、大革命前のフランスでは僧侶は貴族と共に特權的支配階級を構成してゐたことを想起しなければならない。ところでヴォルテールや唯物論者達は、反對派的ブルジョアジーのイデオローグとして、その急進的な教會＝宗教批判にもかかはらず、政治的見解では大體において立憲王制を主張する自由主義以上に出なかつた。

政治的に一層急進的立場に立つたのはルソー（前出）である。ルソーも人類は契約によつて自然的狀態から社會的狀態に入つたとする見解においては、從前の契約說の主張と異るところはない。彼によれば、社會契約の根本問題は「共同の力の全體をもつて、各成員の生命と財産を防禦し保護するところの一つの聯合體を組織し、それによつて、各人は全體と結合しながら而も彼自らにのみ服從し、以前と同樣に自由でありうるやうにすること」である。主權者とは人民全體に外ならず、この全體の共通意志、「一般意志」のみが人民に服從を要求しうるものである。政府は一般意志に基いて設立され、行政權の保管者となる。これに反し立法權はたゞ人民にのみ、即ち主權者にのみ所屬する。ルソーによれば、人民が代議士を選んで立法權をこれに委任するとき彼はすでに自身の自由を失ふのである。

かやうな理由から、彼は古代ギリシアの都市國家の如く、すべての人民の集會が持たれうるやうな小國家においてこそ理想的民主政治は行はれると考へた。大體において大國には君主制が、中位の國には貴族政治が、小國には民主主義が適合する、といふのが彼の見解である。

ところで民主的共和制を理想とするルソーにあつては、小國家が實現できないとすれば、首府を都市から都市へ移動させることにより、「國内に平均して人民が住み、あらゆる土地に同等の權利を與へ、至る所に富と生命とを持たせる」やうにすることが最善の方法である。また各個人が主權者として直接に行動しうるためには、社會において特殊な勢力を及ぼす「部分社會」(身分、階級、その他一般に政治的黨派等)があつてはならず、各人は平等でなければならない。ここに平等といふのは、單に一部の者の特權の排除、法律の前での萬人の平等といふだけの意味ではない。ルソーにあつてはそれは經濟的平等をも意味した。上記引用文における如く、國内における地理的の人口分布の平等、富の平等な分布を理想としたルソーは、同時に人間間の平等なくして市民的自由はありえないと考へた。この種の平等は、「如何なる市民も他の市民を購ふに足るほど富裕でなく、如何なる市民も自己を賣ることを餘儀なくされるほど貧困でないこと」において成立する。彼は從來の法律が富者に役立ち、貧者に有害であつたことを認め、「社會的狀態は萬人が幾許かの財産をもち、餘りに多くの財産を所有しない場合にのみ、人々にとつて有益である」と斷定し、土地先取權は「勞働と耕作」にのみ基かねばならぬと主張してゐる。

かくの如く、ルソーの主張はかなり現實性を缺き、空想的性質を帶びてゐる。それにもかかはらずそれがフランス大革命において大なる役割を演じ、また當時のヨーロッパの革命思想に強く影響したのは何故だらうか？　それは外でもない。彼の「空想」的平等主義、大所有への反對は、決して彼個人のものではなくて、當時のブルジョア革命において革命勢力中の壓倒的部分を成してゐた小ブルジョアジー(農民をも含めて)の空想であつたからである。ルソーに見られる如き、大都市、大産業、大所有に對する小ブルジョア的な否定的態度は歴史的進歩に逆行する反動的なものである反面において、「この同じ平等の觀念はブルジョア民主主義的諸任務の最も完全な、徹底的な、決定的な表現である。……平等の觀念は農奴制のすべての殘存物との闘爭、商品生産の最も廣汎にして純粋な發展のための闘爭を最も堅固に表現するものである」(レーニン)。云ひかへれば、平等主義は封建制に對する農民の民主主義の觀念的表現として革命的性質を有するのである。

かくして著々はルソーを封建制に對する小ブルジョア的革命性、民主主義のイデオローグとして特徴づけることができる。

大革命前のフランスにおける民主主義について語るに當つては、なほ、その傳記が明かでないジャン・メリエの「遺著」に言及しなければならない。それは宗教および教會、僧侶主義を斷罪せる無神論的著作であると同時に、地主、貴族を痛罵し、農民に同情し、人間の自然的自由と平等の思想に基いて搾取なき社會における財産の平等を唱へてゐる。メリエは明かに農民的民主主義のイデオローグであつた。

第三章　自由主義と民主主義の階級的基礎

1　政治的流派としての自由主義と民主主義

讀者諸君は、前章において自由主義および民主主義なる用語が若干異つた意味に用ひられてゐるのに氣付かれたであらう。ヂャーナリズムやブルジョア學者にあつてはこの兩者は殆んど同義語として用ひられてゐるか、又は同一のものの多少異つた方面を表はすものとして使はれ、その異同についてはつきりした見解が示されてゐない。事實、自由主義と民主主義の相異について「學問的」に吟味立てするならば、際限もなく種々のスコラ的な概念分析が出てくるであらう。次に述べるところは、概念や語義の分析ではなくて、科學的社會認識において社會上、政治上の如何なる傾向に自由主義の名が與へられ、如何なる潮流が民主主義と呼ばれてゐるかといふことである。

自由主義と民主主義の相異を示す一例として、ソヴェート同盟をあげよう。そこでは廣汎な人民のための民主主義は實現されてゐるが、自由主義國だと云ふことはできない。そこでは一切の反革命的行動や宣傳に對しては自由主義的寛容は全然問題にならないのである。それにもかかはらず、壓倒的多數の勤勞人民は自由を享受してゐる。そこには高度の民主主義が支配してゐるからであり、人民の

固有の意志、利害がすべてを決定するからである。然らば、他の資本主義的「民主主義國」はどうだらうか？　ここでは自由主義が謳はれ、また民主主義的な政治形式によつて形式上では全人民が政治的に平等の權利を有してゐる。それにもかかはらず、經濟的、社會的に資本家に隷屬してゐる勤勞者大衆は、思想的にも（「輿論」を通して）資本家階級から獨立でありえず、その結果、法律的、形式的自由にもかかはらず實質的には眞の人間的自由を獲得してゐない。ここでは自由主義はブルジョア獨裁の隠蔽物として役立ち、人民の意志は事實上、大多數の場合支配階級の意志に左右され（無意識裡に）、すべては後者の利益のために行はれるのである。

かやうに近代ブルジョアジーが自由主義を標榜してゐることから、自由主義を以つてブルジョア的なものとすることは、少なくとも歴史的事實としては正當である。かう云へば、近代ブルジョア國家は民主主義國家であり、ブルジョアジーは民主主義を標榜してゐるではないか、と反問するであらう。如何にもその通りである。問題はレーニン（一八七〇＝一九二四）の言葉をかりていへば、民主主義にも色々あるといふことである。民主主義革命への參加者には、ブルジョアジイ、小ブルジョアジー（農民をも含む）、プロレタリアートがある。これらの要素の中、ブルジョアジーが特に自由主義者として特徴づけられ、小ブルジョアジーとプロレタリアートは、民主主義の擔ひ手として規定される。自由主義と民主主義といふ用語のこのやうな使用は、マルクス、エンゲルスに發し、レーニンによつて確立されたものである。これによれば、自由主義は民主主義の謂はゞ「右翼」とでも云ふべき

ものである。次に若干の引用をする。

一八四八年のドイツにおけるブルジョア革命の敗北の經驗について吟味したマルクス（一八一八＝八三）はカムプハウゼン内閣の下で持たれた「統一議會」における大ブルジョアジーの代表者を「自由主義的反對派」と呼び、それは「ブルジョアジーの利益や要求にもはや照應しなかつた統治形態に對するブルジョアジーの反對派以外の何ものでもなかつた」と云ひ、この自由主義者達が革命的人民の友でないのはその階級的本性の然らしむるところであることを明白にしてゐる（「プロシア革命の決算」）。

エンゲルス（一八二〇＝九五）は一八四八年のフランクフルト議會の如き、大多數が「自由主義的辯護士や空論家＝教授」によつて構成された機關に、政府側からの抵抗を粉碎するための「武力」の組織を期待することは餘りに過大な期待であつたと述べ、また小ブルジョアジーについて、この階級は強力な封建的又は君主制的政府の下では奴隷的に溫順であり、「ブルジョアジーの勢力が强化するときには自由主義の側に移り」、後者が權力を獲得するときには「民主主義的激昂」にかられるといふことを明らかにしてゐる（「革命と反革命」）。更にエンゲルスは、ドイツ農民戰爭時代の「ブルジョア的反對派」を「わが今日の自由主義者の先達」として特徴づけ（「ドイツ農民戰爭」）、この反對派と「農民的＝平民的反對派」との對立を指摘してゐる。

エンゲルスの指摘した如く、十六世紀のドイツ農民戰爭、十七世紀のイギリス革命、十八世紀のフランス大革命において革命の推進力をなしたのは農民と都市平民であり、彼等は後の二つの場合にお

いてはブルジョアジーの意圖する所よりも「行き過ぎ」、そのことによつて却つてブルジョア民主主義革命を徹底的ならしめ、この戰果はやがてブルジョアジーの手に收められた。

レーニンはフランスのブルジョアジーについて「フランスにおける自由主義ブルジョアジーは、すでに一七八九＝九三年の運動において徹底的民主主義に對する自己の敵意を示し始めた」と書いてゐる。「そして勞働階級を先頭とするフランスの民主主義は、自由主義ブルジョアジーの動搖、裏切、反革命的調子に對抗して、困難な『カムパニア』の永い系列の後に、一八七一年以來强固となつたかの政治的秩序（共和制——筆者）を創始したのである」（「選擧戰の原則問題」）。初め君主主義的であつたフランスの自由主義ブルジョアジーは、一八七一年を以つて完結したブルジョア民主主義運動の永い經過の間に、勞働者および農民の民主主義の壓力によつて共和主義へと再教育され、再訓練された。レーニンも「正に都市平民（卽ち近代プロレタリアート）と民主主義的農民の同盟こそは、十七世紀のイギリス革命、十八世紀のフランス革命に振幅と力を賦與したものである」（同上）と斷定してゐる。

「徹底的民主主義」に對する自由主義の敵意裏切りは前者がプロレタリアートの指導の下に獨自な勢力として進出した一八四八年にはマルクス、エンゲルスも指摘した如くすでに確定的となり、ロシヤの一九〇五年、一九一七年の經驗は自由主義と民主主義の間に存する深刻な溝渠を決定的に明らかにした。

「自由主義を民主主義から分離する深刻な階級的根底を意識せずには、この意識を大衆の中に廣めずにはかくして『人民の自由』の事業に對する自由主義の裏切と動搖を中立化することを學ばずには、ロシ

ヤの民主主義は二つの眞劍な一歩前進をもなしえない。」とレーニンは書いてゐる。（「自由主義と民主主義の分離」）

一九〇三年に分裂したロシヤ社會民主黨内のメンシェヴィキーとボリシェヴィキー（レーニン派）の意見の相異の中心點は、前者が自由主義と民主主義の階級的差異を理解せず、民主主義運動において自由主義者との妥協的提携を主張したのに對して、レーニンが民主主義、特に農民的民主主義との同盟を主張した點にある。かくして自由主義と民主主義の區別を知らなければ、マルクス＝レーニン主義における肝要なものを理解できなくなる。

もちろん、自由主義といへど、官僚的＝絶對主義的支配に對して實際に闘ふ限り民主主義の味方であり、「あらゆる自由主義は、それが實際において（口先きだけでなく――筆者）專制主義に對する闘士として進出する限り社會民主主義がそれを支持するのに適してゐる」（レーニン「自由主義と民主主義」）。マルクス、エンゲルスも、レーニンも、自由主義者が「空論家」であり、會議、決議、宣言、言論等の上では絶對主義と闘つても、民主主義的人民が實力を以つて「徹底的民主主義」のために闘ふときには尻込みし、裏切り、敵と妥協したことを指摘してゐる。自由主義が進歩的であるといふことからは、それが反革命的でないといふことは必ずしも歸結されない（註）。

（註）わが國では當て、野變な檢閲をごまかすために、「進歩的」と「革命的」なる語が同義語として用ひられた場合があつた。正しくはこれは區別されなければならない。反革命的な進歩性もあるからである。例へばビスマルクの手で行はれたドイツの「上から」の革命、一九〇五年の後におけるストルイピンの農業改革は、人民の

民主主義の壓力の下に、これと闘ひながら（即ち反革命として）、歴史的進歩の線に沿つて展開されたものであつた。ラッサールがビスマルクを、立憲民主黨がストルイピンを支持したのは、それが反革命的ながらも進歩的であつたが故であつた。わが國において、明治前半の官僚的絶對主義の進歩性を云爲して、これを讃美する（例へば佐野學氏、林房雄氏の「青年」）のも、自由主義者には相應しいことであるが、民主主義者はこの進歩性が反革命であることを指摘しなければならない。

以上によつて、封建制や封建的乃至半封建的絶對主義と闘爭するところの、一口にブルジョア民主主義と呼ばれる社會的＝政治的潮流において、ブルジョアジーの代表する傾向が自由主義であり、農民を主要構成分子とする小ブルジョアジーおよびプロレタリアートの代表する傾向が民主主義であるといふこと、即ち民主主義は自由主義をも含むと共に、自由主義が本格的民主主義でない限り、それから區別されるといふこと、は明白である。

この區別はブルジョア民主主義革命におけるプロレタリアートの戰術の正しい設定や近代社會史の科學的分析にとつて決定的に重要なのみでなく、またイデオロギー史の研究にとつても導きの絲となるものである。例へば十九世紀のロシヤについて、ヘルツェンは民主主義と自由主義の間を動搖したが大體において民主主義者であつたとか、ツルゲーネフは自由主義者であり、チェルニシェフスキーやサルチコフ＝シチェドリンは民主主義者であつたと云ふとき、これらの人々の思想や藝術の性格の階級的差異が適確に表現されるのである。

なほここで、農民的民主主義の特異な運命について若干注意しなければならない。

資本主義はいつも人民の民主主義革命の勝利をまつてその發展條件を確保するとは限らない。人民の力が革命の勝利に必要なだけの程度に展開されない所では、封建的乃至半封建的支配階級はブルジョアジーとの妥協により、國の資本主義的發達への途を開き、みづからも大なり小なりブルジョア化しつつ支配的地位を依然として確保することができる。帝制ドイツの場合の如きはそれである。かやうな場合には農業においては古き封建的關係が殘され、農民の民主主義は實現されない。そこでは地主は農民の封建的隷屬を利用して、資本主義的大農業を發達させ、農民は種々の苦難な過程を經て農業プロレタリアに轉化する。農民革命を經ない、かかる不徹底な、農民にとつて苦痛な資本主義發達の途、所謂「プロシア」的な途と異つて、勝利せる人民革命によつて封建的土地所有が廢止され、民主主義的な土地再分割が行はれるところでは農業の資本主義化はより徹底的に促進される。ところで農業の資本主義化は、一方に少數の資本主義的農業經營者(ファーマー)と、他方に多數の農業勞働者、農村プロレタリアとへの「農民」の分化となつてあらはれざるをえない。エンゲルスは「農民とは正に勝利(ブルジョア革命の——筆者)の經濟的結果によつて最も確實に滅亡する階級である」のに、ブルジョア革命が徹底的に戰ひ拔かれた(イギリスやフランス)のは正に農民と都市平民の力によるものであるといふ、一見奇妙に見える事實を指摘してゐる(「空想より科學へ」)。しかし封建的土地關係の徹底的一掃による農業の資本主義化の促進は、「プロシア的」な途によるものよりは農民にとつてはるかに有利であることは、發達した資本主義的農場の勞働者の方が農奴や作男よりもましなのと同樣である。

だがブルジョア民主主義革命がプロレタリアイトのヘゲモニーの下に、これと農民との同盟の下に遂行され、それが社會主義革命にまで押し進められた場合(ソヴェート同盟の十月革命)においては、農村における封建的土地所有の一掃の後に、農業を資本主義的發達の線に沿つてでなく、社會主義の方向に向つて導くことが、社會主義建設のために絶對に必要であるし、また可能である。この可能性は、資本の壓迫がないときには、特にプロレタリア國家の側からの援助(特に農業機械等の提供による)の下では、個人經營よりも共同經營の方が著しく農民にとつて有利である、といふ事實の中に存してゐる。ソヴェート同盟における農業の社會主義的集團經營はこのやうにして建設されたものであり、それはドイツ・ファシストの侵略に對する祖國防衛戰爭において偉大なる力を發揮した。

2　國家形態としてのブルジョア民主主義とプロレタリア民主主義

ルソーが貧富の懸隔の著しい社會においては民主主義は實現されえない、と考へたのは正しい。だが各人が經濟的に著しく不平等でなく、しかも利害の原則的對立を有しないやうな社會は、發展した共產主義の段階であつて、そこではもはや階級分化は存在しないから、階級支配の道具としての國家は死滅し、民主主義は完全に展開されると同時に、そのことによつてまた國家形態としては不要となり死滅することとなる。

從つて民主主義が國家形態として存する限り、それは社會の階級分化を前提としてゐる。もちろん

民主主義は、ブルジョア民主主義でも、官僚政治、絶對主義等の如き封建制の遺物に比して甚大なる進歩である。しかし、ブルジョア民主主義革命の戰果が――勞働者大衆および農民の力によつて達成されたにかかはらず――資本主義の下ではブルジョアジーの手に收められるといふ歴史的必然性は、國家制度としてのブルジョア民主主義をブルジョアジーの人民支配の用具たらしめる。

「支配階級の思想はいづれの時代においても支配的な思想である、……物質的生産のための諸手段を支配する階級は、それによつて同時に精神的生産のための諸手段を支配し、かくして、それによつて同時におしなべて、精神的生産のための諸手段を缺ける人々の思想はこの階級に隷從せしめられることとなる」（マルクス、エンゲルス「ドイツ・イデオロギー」）。このやうに被抑壓階級が經濟的、社會的のみならず、精神的にも抑壓者の階級に隷從してゐるところでは、如何なる民主主義も支配階級による被抑壓階級の政治的支配を撤廢することはできない。封建制下のブルジョアジーは、舊社會の胎内にその對立物として發生した資本主義的生産力の支配者として、精神的にも封建的イデオロギーに對抗する固有のイデオロギーを作り出すことができた。そして資本主義的生産力の發展はますます反封建的思想を大衆化せしめ、最後にブルジョア革命によつて新しい生産力の一層の發展のための社會的條件を造出した。ブルジョアジーのこの反封建的イデオロギーとしての自由主義が、人民の革命的エネルギーによる封建的支配の顚覆を通して實現され、民主主義的國家形態が確立されることは、プロレタリアートのブルジョアジーに對する鬪爭、團結、思想的獨立性の獲得のために極めて重要なこ

とである。しかしながら資本主義の下では物質的生産力の支配者でないプロレタリアートは、精神的にも支配者たることはできない。プロレタリアートおよび一般勤勞大衆の先進分子は、日常鬪爭の指導や宣傳によつてプロレタリアートにその社會的存在の眞實、人民解放者としての歴史的役割を意識せしめ、この意識を廣めるためには、異常な困難と戰はなければならない。大抵の資本主義國では、勞働運動はブルジョア自由主義の精神に侵され、眞にプロレタリア的な精神は勞働者大衆の大多數を捉へてゐない。だがブルジョアジーの支配がぐらつき、階級鬪爭が激化し、革命的情勢が成熟するにつれて、プロレタリアートの精神的獨立性、革命性は急速に生長する。かかる時機にはブルジョアジーはその自由主義的假面をかなぐり捨て、ファシズムを採り入れることとなる。だがより「平和的」な情勢の下では、學校、報道機關、出版、ラヂオ等を獨占し、宗教や種々の教化機關の掩護を受けてゐるブルジョアジーは、「民主主義」の下でも完全にその獨裁的支配を確保することができる。かくして「資本主義社會においては吾々は切縮められた、貧弱な、欺瞞的な民主主義、たゞ富者のため、少數者のための民主主義を持つ」といふことになる。ブルジョア民主主義は「ブルジョアジーの獨裁の徹頭徹尾欺瞞的な隱蔽物にすぎず」、「ブルジョア國家の形態は極めて多樣であるが、その本質は一つ、即ち、それらすべての國家は何らかの仕方で、結局においては必ずやブルジョアジーの獨裁であるといふことである」（レーニン「國家と革命」）。

ところでプロレタリアートのヘゲモニーの下におけるこの階級と他の勤勞者層（特に農民）の同盟

の形態をとつた民主主義は、勝利せるプロレタリア革命を通して實現されるときは、もはやブルジョア民主主義ではなくてプロレタリア民主主義となる。勿論、勞働階級が政權を獲得したとしても、單に封建的關係の清掃を以つてやめるならば、即ちブルジョア民主主義の實現を以つてやめ、ブルジョアジーによる生産手段の獨占即ち經濟的支配を撤廢しないならば、それはプロレタリア革命ではないし、またその勞働階級は永く權力を維持することはできない。プロレタリア革命によつてブルジョアジーの政治的のみならずまた經濟的の支配が顚覆され、プロレタリアートの組織された階級的力としての新國家の下に國有工業の形における巨大な經濟的基礎が据えられるとき、初めてプロレタリア民主主義は確立されうるし、又その永續のためには農業も社會主義化されなければならない。元來、プロレタリア民主主義は社會主義實現の手段であり、資本主義から階級なく搾取なき共産主義社會への過渡期に、資本主義復興の企圖、ブルジョア殘存分子の壓伏のため、また他の資本主義諸國の壓迫に備へるために不可缺とされる國家形態である。從つてそれは「人民の尨大なる多數者のための民主主義」であり、「人民の搾取者、抑壓者を力によつて壓伏すること、即ち民主主義から除外すること」であり、プロレタリアートの獨裁である。

プロレタリア民主主義は、階級獨裁として、ブルジョア民主主義の如く欺瞞的でなく、少數の人民抑壓者、搾取者を公然と「民主主義から除外」し、彼等に政治的自由を與へない。だがそれは歴史上初めて支配階級へと高められた被搾取者の組織であることによつて、「民主主義の巨大な擴張」、「人

民のための民主主義」として、ブルジョア民主主義よりはるかに高度の民主主義である。「プロレタリアートの獨裁は、即ち共産主義への過渡期は、少數者、搾取者の必要なる壓伏と並んで、初めて人民のため、多數者のための民主主義を與へるものである。たゞ共産主義のみが眞實に完全な民主主義を與へることができる。そして民主主義は完全であればある程、より早く不要となり、おのづから死滅する」(「國家と革命」)。抑壓さるべき少數者、民主主義から「除外」される搾取者が消滅するとき、民主主義は完全なものとなると同時に、プロレタリアートもプロレタリアートでなくなり(無階級社會となり)、階級支配の形態としての民主主義も、即ち國家も「死滅」するであらう。人々はそこでは暴力、强制なしに、强制のための特殊裝置たる國家なしに、共同生活の必要な規律を遵守し、社會的に計畫された搾取なき自由な經濟生活を營むであらう。

プロレタリア民主主義(獨裁)の一形態としてのソヴェート國家は、資本主義から共産主義への過渡期を表はすものとして、嚴密には國家でなく、搾取のための公的機關としての本來の意味の國家とは反對に搾取絶滅のための機關であり、「死滅」に向ひつつある國家である。しかもそれは人民の總力の眞の民主主義的結集として、如何なる資本主義國家をも凌ぐ强靱性を有しており、この强靱性こそは將來の高度共産主義社會の實現、即ちもはや階級も國家もない社會の實現、云ひかへれば將來における國家のおのづからなる死滅を保證するものである。これがプロレタリア獨裁の辯證法である。

以上によつて、國家形態としての民主主義の社會的、階級的本質は明白になつたと思ふ。プロレタ

リアートはブルジョア民主主義の支配の下では、絶對主義や封建的君主制の支配の下におけるよりもはるかに有利に、自由に自己の解放のために力を結集し、闘爭を展開することができる。またプロレタリアートの指導下にブルジョア民主主義革命が成就された曉には、彼は力に應じてこれを社會主義革命、プロレタリア革命へと轉化せしめることができるし、またしなければならない。さもなければブルジョア革命の戰果は資本家階級の手に落ちてしまふ。十八世紀末フランスの未成熟なプロレタリアートたる都市平民（および農民）を代表したジャコバン派の沒落は、このことをよく示してゐる。

ブルジョア民主主義革命のプロレタリア革命への轉化といふ思想は、プロレタリアート獨裁の理論と共に、レーニン主義における決定的に重要な要素を成すものである。

第二インタナショナルやメンシェヴィキーはブルジョア民主主義革命とプロレタリア革命の間には萬里の長城が存し、ブルジョア革命の終了後プロレタリアートが力を蓄積して資本主義との「決戰」に進む迄には一定の期間が必要である、と考へた。このやうな見解の下においては、ブルジョア民主主義運動におけるプロレタリアートのヘゲモニーの代りに、自由主義者への妥協的追隨の理論と實踐が出てくることは當然である。然るにマルクス、エンゲルスも指摘した如く、一切のブルジョア革命においてその推進力となるのはプロレタリアート（又は「前期プロレタリアート」たる都市平民）と農民であり、フランス大革命の場合の如く、この兩者が自由主義ブルジョアジーの指導下から脫し、「行き過ぎる」ことによつて革命が徹底的となるといふことは、近代社會發展の一般法則でさへある。

社會主義革命が問題にもなりえなかつた當時の歴史段階においては、人民革命の民主主義的指導者達が權力を維持しえず、革命の戰果をブルジョアジーに横取りされるといふ悲劇は不可避的であつた。だが帝國主義時代において、資本主義の生産力が社會主義の可能的基礎たりうる迄に發達してゐる國においては、人民革命の指導者たるプロレタリアートはブルジョア革命をプロレタリア革命に轉化せしめることができる。他面からいへば、多くの小ブルジョア的要素を含む「都市平民」でなく、正に近代プロレタリアートが運動のヘゲモニーを握るといふ事實そのものが、すでに何らかの仕方によるプロレタリア革命への前進の可能性を立證してゐるのである。

「プロレタリアートは、力をもつて專制の抵抗を粉碎し、ブルジョアジーの不安定性を無力化するために、農民大衆を自己に合體せしめつつ、民主主義的變革を最後まで徹底させなければならない。プロレタリアートは、力をもつてブルジョアジーの抵抗を破碎し、農民および小ブルジョアジーの不安定性を無力化するために、半プロレタリア的人民要素の大衆を自己に合體せしめつつ、社會民主主義的變革を完成しなければならない。」（「二つの戰術」）これは一九〇五年にすでにレーニンが述べた言葉である。彼はこれらの命題を一層具體化して次の如く云つてゐる。「初めには君主制に抗して、地主に抗して、中世に抗して『全』農民と共同する（そしてその限り革命はブルジョア的、ブルジョア民主主義的なものである）。次に、農村の富者、富農、投機師を含めた資本主義に抗して、貧農、半プロレタリアート、すべての被搾取者と共同する、そしてその限り革命は社會主義革命となる。この

兩者の間に人爲的な萬里の長城を設け、プロレタリアートの準備の程度およびそれと貧農との結合の程度以外の何ものかによつて一つを他から分離しようと試みるのは、マルクス主義の最大の歪曲、その俗惡化であり、自由主義とのすり替えである」（「プロレタリア革命と背敎者カウツキー」）。このレーニン的見解は十月革命によつて完全にその正しさを裏書きされた。わが國の如く、ブルジョア民主主義革命の徹底が當面の課題である國においては、この革命のプロレタリア革命への轉化といふことはプロレタリアートにとつて決定的な問題である。この轉化の遲速は客觀的には資本主義發達の程度によつて制約され、主體的には、窮局においてこの客觀的條件によつて規定されるところの「プロレタリートの準備の程度」およびこの階級と貧農、一般被搾取者大衆との結合の程度に依存する。中國共産黨の「新民主主義」も、支那の諸條件の下で豫想されるこの轉化の線に沿つた方策に外ならない。

もちろん現代においては高度に發達した資本主義國ではもはやブルジョア民主主義は實現された事實であり、そこではプロレタリアートの任務は直接に社會主義革命に進むことである。また封建的殘存物が資本主義に從屬せる二次的要素として殘つてゐる國では、ブルジョア民主主義的性質をもつた課題を廣汎に包含したプロレタリア革命が當面の任務となつてくる。

最後に、自由主義者によつて廣く流布されてゐる、民主主義か獨裁か、といふ二者撰一の誤謬、即ち兩者を對立するものの如く取扱ふ誤謬が、依然として多くの「社會主義者」によつてさへ抱懷されてゐる事實は見逃せない。自由主義者やこれらの「社會主義者」は、プロレタリアート獨裁の反對者として、この獨裁が搾取者を「民主主義から除外する」ことを以つて反民主主義と考へ、反對にブルジョア民主主義がブルジョア獨裁の形態の一つに外ならないことを見落して、ブルジョア民主主義的議會主義を主張するのである。彼等は、ブルジョア民主主義の下ではあらゆる政黨や、プロレタリアートにすら選擧權が與へられ、政治參與が認められてゐるといふ「自由主義」的寬容を以つて、民主主義の最善なるものと見做してゐる。この際大事なことは彼等が次の一事を忘れてゐることである。即ちブルジョア民主國家の下でプロレタリアートや勤勞人民が享受してゐる自由は彼等が革命や永年に亙る鬪爭によつて戰ひ取つたものであるといふことを。而かもブルジョアジーは民主主義の形式の下で實質的には自己の階級的獨裁を確保してゐるのである。このやうに民主主義と階級獨裁は決して矛盾するものではない。これを矛盾するものと考へ、欺瞞的なブルジョア民主主義の外見に惑はされてプロレタリア獨裁に反對する「社會主義者」（社會民主主義者）は實は階級鬪爭を自由主義的＝議會主義的改良主義によつて緩和し、革命を封殺せんとするものに外ならない。故にレーニンは「階級鬪爭の承認をプロレタリアート獨裁の承認にまで擴張する者のみがマルクス主義者である」と云つた。階級對立こそは民主主義の前提である。民主主義とは階級支配の形式に外ならないといふ事實を認識しないならば、ブルジョア民主主義よりはるかに高度な多數者のための民主主義としてのプロレタリアート獨裁の本質を理解することはできないし、ブルジョア民主主義より先に進むことはできない。勞働階級は誰が眞に自分の味方であるかを知るためにはプロレタリアート獨裁に關する見解を以つて試金石とすることができる。

第四章　マルクス前の社會主義

1　空想的社會主義

吾々は先に、イギリスにおける資本の原始的蓄積の重要な一環を成した「土地圍ひ込み」(土地からの農民の「解放」)がモーアの「ユートピア」の現實的地盤であるのを見た。將來社會に關するこの「ユートピア」的夢想は十七世紀にはカムパネラ(一五六八―一六三九)の「太陽の國」、ベーコン(前出)の「新アトランチス」となつて現はれたが、何れも當時の社會的現實の認識乃至批判に立脚したものでなく、社會主義的なものでもない。たゞ「新アトランチス」が科學と技術の進歩による社會的福祉の增進を考へてゐる點に、當時の自然科學の精神を見ることができる。

マニュファクチュアの繁榮期に入つてゐた大革命直前のフランスでは、そこに鋭く展開された唯物論や、感覺論の形における反神學的世界觀や、自然法的平等思想やの影響の下に、モレリ(傳記不詳)やマブリー(一七〇九―一七八五)のユートピア的、卽ち空想的社會主義思想が生れた。マルクスは「人間の本來的の善および平等な知的天賦、經驗、習慣、教育の全能、人間に對する外的環境(影響、産業の高き意義、享樂の正當視等に關する唯物論の學說から、共産主義および社會主義との唯物論の

必然的聯關を洞見するには大なる鋭智を要しない」と云ひ、更に進んで次のやうに述べてゐる。「ブーリエは直接にフランス唯物論者の學說から出發してゐる。バブーフ主義者は粗野な開化せざる唯物論者であつた、だが發展した共産主義も直接にフランス唯物論から發してゐる。この唯物論は卽ち、エルヴェシウスがそれに與へた形態において、その母國たるイギリスにまひ戻つてゐる。ベンサムはエルヴェシウスの道德の上にその良く知られた體系を基かせ、同樣にオーエンは、ベンサムの體系から出發して、イギリスの共産主義を基礎づけた。イギリスへ追はれたフランス人カベーは、そこの共産主義思想に刺戟されて、フランスに歸つて、ここで共産主義の最も淺薄なりとはいへ最もポピュラーな代表者となつた。より科學的なフランスの共産主義者、デザミー、ゲイ等はオーエンと同じく唯物論の學說を現實的ヒューマニズムの學說および共産主義の論理的基礎として展開した」(「神聖家族」)。このやうにして近代社會主義、共産主義の思想が先づフランスに起つた原因、理解されよう。

モレリの「自然の法典」(一七五五)には、人間はその生活の再生産に必要とする所より以上のものを私有すべきでなく、萬人は社會において平等に生活を保證さるべきであり、各人は能力に應じて社會に寄與すべきであるといふ「自然の法則」に基いた、民主的な共産社會が構想されてゐる。マブリーは財産の私有、富の不平等が生れながら善なる人間(貧者)を邪惡ならしめると說き、やはり共産主義を理想として唱へ、それへの道程として改良主義的政策による人間の道德的向上を說いた。一七九七年に處刑されたバブーフ(一七六〇―一七九七)の祕密結社には、これらの共産主義思想が、そ

れに結びついてゐる平等主義と共に強く影響してゐる。

イギリスにおいては、すでに産業革命の開始されてゐた十八世紀末に、ゴドウィン（一七五六＝一八三六）の今日謂ふところの無政府共産主義の學說が出現した。彼は、人間の德と惡德はその生涯を規定する環境によつて決定されるといふ、唯物論の思想から出發し、環境の改善が人間を善ならしめると考へ、「政治的正義」に基く幸福なる共産主義社會を構想した。

次いで十九世紀初頭にはチャールス・ホール（一七四五＝一八二五）が社會主義思想を提唱した。ホールは「文明」の發達、文明國における生産力の發達が、一部のものの富と力の增大と他のものの「貧困と隷屬の增大」を招致してゐる點を批判し、富者（地主と資本家）と貧者の利益の對立を認め、一切の社會的害惡の源泉としての富の不平等の是正の必要を强調してゐる。尤も彼はこの是正は富者の善良な意志に待つべきであるといふ、小ブルジョア的改良主義以上に出なかつた。

以上の人々に次いで、十九世紀初頭には、空想的社會主義の三大代表者、即ちフランス人サン・シモン（一七六〇＝一八二五）、フーリエ（一七七二＝一八三五）、イギリス人オーエン（一七七一＝一八五八）がやつて來た。サン・シモンの處女作「ヂュネーヴ人の書簡」は一八〇二年に、フーリエの處女作「四つの運動の理論」は一八〇八年に出、オーエンは一八〇〇年に社會改良家としての活動を始めてゐる。

サン・シモンは近代社會の歷史を封建體制に對する「産業體制」の鬪爭と見、フランス大革命はこ

540849

の鬪爭の所産であることを見出した。それのみでなく、すでにその處女作において彼はフランス大革命の最高潮期の中に有産者に對する無産者の鬪爭を觀取した。だが彼はこの天才的な洞見にもかかはらず、無産者の階級に向つて、「諸君の同僚が支配した時代のフランスに何が起つたかを觀よ、彼等は飢餓を生じせしめたのだ」と叫んでゐる。サン・シモンにとつては、階級鬪爭は害惡であり、特に「産業家」たる有産者と「極貧者」の間には本來利益の對立は存在すべきものでなかつた。

彼は「有閑階級」（貴族、官僚、金利生活者等）の支配する舊社會に「生産階級」の支配する社會が代位する點に社會進步の理想を見出すとはいへ、これが階級鬪爭によつて行はれるのは害惡であり、「これらの變革は道德的感情の力によつて行はれる」べきであると主張した。この道德的感情とはキリスト敎的博愛主義に外ならず、かくて彼は「新キリスト敎」に社會改革の期待をかけた。

さてサン・シモンの時代のフランスでは「有閑階級」に對する「第三身分」の鬪爭の任務は未だ殘されて居り、他面において「第三身分」の中における有産者と無産者の對立、矛盾は本質的、必然的のものと意識されうる迄に成熟してゐなかつたから、彼が「最大多數の最大幸福」（原則に基いて「最大多數階級の精神的、物質的生活の改善」に役立つ社會制度を構想するに當つて、この最大多數階級たる「生産階級」に資本家をも勞働者をも農民をも包含せしめてゐるのは何ら不思議でない。「生産階級」の成員なる「産業家」（ブルジョア、勞働者、農民）とは「社會成員にその需要の充足のための一つ又は數個の物質的手段を提供する目的で勞働する者」のことであり、この階級が支配する社會

即ち彼のいはゆる「産業體制」においては、經濟上のすべての權力は産業家に、知的生活における權力は學者に歸屬しなければならない。この來たるべき社會の基礎は勞働であつて、一切の特權や相續權は廢止さるべく、それは能力に應じての報酬に代位されなければならない。「産業體制」の社會の全經濟生活は有力な土地所有者、工場主、商人、銀行家から構成される「産業家協議會」によつて計畫的に統制され、これによつて不生産的浪費や競爭や國内鬪爭は排除されるであらう。

このやうにサン・シモンは「最も貧しい階級の幸福」の向上を「産業體制」に見出してゐる。從つてこの極貧階級に對する彼の同情にもかかはらず、彼は共産主義者ではなく、彼の「産業體制」とは合理化され改良された資本主義社會に外ならなかつた。

フーリエは、マルクスも指摘した如く、本來善なるものとしての本能の肯定、快樂說等においてフランス唯物論の學說から出發してゐるに拘はらず、「一七九三年の破局」の否定的批判者として、主觀的、意識的には十八世紀の啓蒙の反對者であつた。彼は大革命の如き慘事をひき起した啓蒙哲學や一般に「文明」を謳歌するすべての思想に對して、否定的態度をとつた。彼によれば、これらすべての思想は社會的悲慘や貧困を防止する途を知らないからである。かくしてフーリエは、幾多の悲慘をもたらしてゐる「文明」を肯定する當時の一般的信念に對する「絶對懷疑」と、「貧困を豫防する」ことを知らない「不確實な科學」(十八世紀の哲學)によつて提示された途を行くまいとする「絶對廻避」との、二つの方法論的規則に基いて、彼の所謂「文明時代」(資本主義)の社會的害惡、勞働者の窮狀

を痛烈に剔抉すると共に、獨自の極めて空想的な理想社會論を打立てた。

(註) この「絶對廻避」にもかかはらず、「人民の福祉が最高の法則である」と考へて貧困を除去しようと企てたフーリエは、啓蒙哲學の相續人であつた。

政治や宗教の批判に從事した啓蒙思想の途を避けようとするフーリエは「社會的福祉は、行政や僧職には何の關係もなく、たゞ産業と家庭生活のみに關係し、政府の干渉を必要とせずにあらゆる政府と調和しうるが如き方策」の中に求められるべきであると考へた。

かくして彼は社會的福祉を保證する制度として、千五六百人の組合員から成る勞働組織(所謂ファランジュ)を細胞とする聯合體を構想した。ファランジュは自給自足の原則に基く協同體であつて、そこでは勞働はもはや身心消磨的でなく、多樣にして魅力あるものであり、文明社會において惡德や害惡の源泉たる人間の本能は幸福と享樂との源泉として開放されるであらう。商業を文明社會の最大の害惡と見做し、自給自足的協同體を考へたフーリエの見解には、當時のフランスにおける資本主義的生産關係(緩慢に産業革命に入りつつあつた)の未成熟さが反映してゐる。

更にフーリエの非政治主義は、社會的、政治的鬪爭の途による理想社會の實現を否認する故に、彼はこの理想社會の實現の手段として、これをあらゆる階級の人々にとつて魅力的なものとし、有産者をも積極的に參加せしめる必要に迫られた。かくしてファランジュにおいては各人の最低限の生活の保證に必要な以上のものは私有を許され、大私有者=資本家への報酬や位階や稱號が約束されてゐる

のである。

オーエンは一八〇〇年にニュー・ラナークの溫情主義的、改良主義的工場主として進出し、勞働者の生活の改善、勞働時間の短縮、勞働者の小供の學校、病院の設立等によつて多大の名聲を博した。だが「最大多數の最大幸福」といふベンサムの功利主義の原則を信條としたオーエンは、資本主義がこの原則に矛盾し、一方に生産力が增大し、有産者の富が增大するにかかはらず、他方に人民の貧困、失業等がますます脅威的となることを見た。特に一八一六＝一七年における資本主義の最初の恐慌は彼の思想に大なる轉換をもたらした。彼は共産主義者となり、一八二五年にはアメリカに共産村の建設を試みた。資本主義的環境の中に小なる共産社會を建設しようとするこの試みは、もちろん失敗に歸した。

オーエンの理想とする共同體においては、「すべての土地、家屋および他の一切の不動産、並びに生産のためのすべての器具、原料およびその他最廣義における資本の名の下に知られてゐるすべての物に關する所有の共同」が存立しなければならない。富は人口よりも急激に增加すると考へた彼は、かかる共産主義社會においては富の不平等な分配や個人的蓄積は空氣や水の不平等な分配と同じく無意味なものになる、と想像した。ところでフランス唯物論者の後繼者として、人間の思想や習慣は社會的環境によつて規定されると考へながら、同時に「思想が世界を支配する」といふこれらの唯物論者の觀念論的社會觀をも承けついだオーエンは、啓蒙による平和的な途によつて理想社會を實現すべ

きであると主張した。彼は階級鬪爭に對して否定的であり、ストライキをすら是認しなかつた。彼は普通選擧權すら、勞働者の教育程度が低い間は「望ましくない」と云ひ、一八三〇年前後から始まる勞働階級の民主主義的政治鬪爭に對して否定的態度をとつた。

勞働階級の社會的役割、政治的能力を理解しえなかつたオーエンにあつて、啓蒙の主たる對象が有産者、「統治者」であつたことは當然である。だが同時に彼は、社會平和を亂さない範圍で理想社會に進む平和的方途として、生産協同組合を提唱し、一八三二年に「公正勞働交換所」を設立した。この後者は、商業＝商人の媒介を經ずに、生産者相互間の（「勞働切手」を媒介とする）公正な商品交換を目的としたもので、交換の公正は互ひに價値の等しいものの交換において成立するものとされ、その際生産物の價値は勞働價値說に基いてその生産に要した勞働時間によつて決定された。「交換所」の試みは特に手工業者の間に多大の共鳴を喚起し、これに倣つたものが諸所に起り、かかる組合的組織による生産の管理、進んでは社會主義社會の建設に關する思想が廣まつた。しかしながら生産の全社會的な社會主義的計畫化を伴はない、かやうな小商品生産が、需要との不調和の故に交換の滯滯を來たし、生産協同組合の試みが失敗せざるをえなかつたことは云ふ迄もない。ところでオーエン自身「商業組合」なりとして冷視した消費組合の發達が、協同組合に關する彼の思想に影響されてゐることは皮肉な歷史的事實である。

オーエンの共産村建設や勞働交換所の試みの失敗は、平和的手段による共産主義社會實現に關する

空想的社會主義の思想が、如何に實際上に無力なもの、誤つたものであるかを示し、協同組合の如き純經濟的方法が如何に勞働階級の解放に役立ちえないかを示してゐる。三十年代のイギリスの勞働階級は、すでに政治鬪爭に入つてゐたのである。

2　小ブルジョア的社會主義

以上すべてのユートピアンに共通なことはすでに見たやうに「プロレタリアートの中に何らの歴史的獨立性をも、それに固有な何らの政治運動をも見てゐない」點にある。「階級鬪爭の未成熟な形態、並びに彼等自身の生活上の地位は、彼等をして彼等がこの階級敵對をはるかに超越してゐるものと見做さしめた。彼等はすべての社會成員、最良の條件の下にある成員すらもの狀態を改善しようと欲してゐる」。しかしながら資本主義の矛盾に對する彼等の批判は「勞働者の啓蒙のための最高度に貴重な材料を與へた」。だがプロレタリアートの階級鬪爭の成熟と共に、階級鬪爭や一般にあらゆる社會的鬪爭を否認する空想的社會主義は、すでに反動的なものとならざるをえない。「これらの體系（空想學說――筆者）の創始者達が多くの點において革命的であつたとしても、彼等の弟子達はつねに反動的なセクトを構成してゐる。彼等はプロレタリアートの一層の歴史的發達にかかはらず、その教師達の舊い世界觀を固持してゐる。されば彼等は再び階級鬪爭を鈍らせ、矛盾を緩和しようと終始努めてゐる。」（「共産黨宣言」）

故で、十九世紀三十年代以來の勞働階級の獨立的進出およびこれを背景とする科學的社會主義＝マルクス主義の生誕（四十年代）の時代において、すでに反動性を示し始めた、前記ユートピアンの直接の「弟子達や」、大なり小なり彼等の影響下にあつた社會主義者を一瞥しよう。

先づフーリエ主義者コンシデラン（一八〇八＝九三）がある。彼もその教師と同じく革命の反對者であり、政治鬪爭に對して否定的であつた。「吾々はすべて、萬人が例外なく幸福であることに關心する。そして各階級にとつてはその特殊利益の保證の最善の手段は、それを他階級の利益と結びつける點にある」。「一部分學の他に對するあらゆる反抗は正當でない。協合、調和、完全にして自由な秩序の發達のみが正當である」。これがコンシデランの主張である。

サン・シモン主義の代表者としては、アンファンタン（一七九六＝一八六四）とバザール（一七九一＝一八三二）をあぐべきである。彼等は從來の社會が「人間による人間の搾取に立脚」しており、今後の進歩は搾取の絶滅にありと主張し、有閑階級と「勤勞階級」の利害の對立を見、サン・シモンと同じく後者の支配する社會を願望し、その際生產手段の國有をも考へた。だが「勤勞者」とは企業家をも含むものであり、その利潤はアンファンタンによれば「勞働賃銀」に外ならず、「有閑階級」とは地主と金利生活者である。しかも產業の發達に伴つて利子および地代は低下し、有閑者は斷えず減少すると彼は說いてゐる。かやうな立場からブルジョアジーに對するプロレタリアートの鬪爭が否認されることは云ふ迄もない。一般に革命を害惡視し、社會的鬪爭を有害視する點でサン・シモン主義

者はその教師に忠實であり、三〇＝四〇年代の勞働階級の獨立的闘爭の展開の時代に、彼等の主たる努力は革命を避けることに向けられた。

フランスにおけるオーエン主義者はカベー（一七八八＝一八五六）である。彼はフランスにおいてオーエン主義を宣傳し、一八四八年の革命の最中に彼の追隨者達はアメリカに渡つて共産村の建設を企てた。（翌年彼もこれに加はつた）。非政治主義者コンシデランすら革命の渦中に捲き込まれ、國民集會においてフーリエ主義者にファランジュ建設のための援助を與へよと提言してゐたとき、カベーの非政治主義はこのやうに徹底してゐたのである。

一八四八年の革命にかけてフランスの勞働者や特に廣汎な手工業者の間に影響力を持つてゐたものに、小ブルジョア的社會主義者ルイ・ブラン（一八一一＝八二）とプルードン（一八〇九＝六五）がある。何れも大なり小なりサン・シモンやフーリエに影響されたことは云ふまでもない。

ルイ・ブランは資本主義の害惡の根源を自由競爭に見出し、自由競爭はブルジョアジーにとつても勞働者にとつても有害であると考へた。彼は資本主義社會の矛盾を除去するために生産組合的な「勞働組織」を提唱した。この組合においては年利益の總高は三つの部分に分たれ、第一の部分は組合員に平等に分配され、第二の部分は老人、病人、不具者等の扶養および恐慌に對する備へに當てられ、第三の部分は新加入者への生産用具の提供に當てられる。また組合に加入する資本家はその投下資本に對する利子を支拂はられる。ルイ・ブランの「勞働組織」はファランジュの如く自給自足的でなく

相互に扶助すべきであり、初め工業部門において次々に建設され、遂には農業をも捉へなければならない。

ところでルイ・ブランによれば、組合の組織のためには國家の後援が必要であり、國家はこの目的のために銀行、鑛山、鐵道等を自己の手に收めなければならない。プロレタリアートの役割を認めず、支配階級をして現存秩序の不公正を認諾せしめさへすればよいと考へ、「闘爭なき社會主義」を空想したルイ・ブランにあつては、理想の國家はプルジョアジーと並んで勞働階級の代表者が政府に列する民主國家に外ならなかつた。彼はこの見解の下に四八年の革命に當つて反革命的プルジョア政府の閣員となり、その理論の小ブルジョア的反動性を實踐の上で曝露した。

プルードンはルイ・ブランと異つて生産の組織よりも信用の組織に注意を向け、利子の廢止によつて勤勞者の地位の改善を期しうると考へた。「財産は盜奪である」と叫んだ彼は、大所有の反對者として、利子を産む資本を資本の主形態と見なし、これが絶滅を主張したのである。「吾々は財産を欲する、即ち各人がその勞働、その營業および知能の果實を自由に處理することを欲する。……吾々は高利貸付なき財産を欲する」。このやうに主張するプルードンは共産主義の反對者であり、「或る中間階級へのブルジョアジーとプロレタリアートの解消」を以つて當面の課題とした。彼は「ブルジョアと資本家」（利子によつて生活する者）を區別し、小ブルジョア＝小經營主を「ブルジョア」となし、かかる「ブルジョアジーとプロレタリアートの團結」、「プロレタリアと經營主の利益の連帶性」を說教し

てゐる。ここに彼の小ブルジョア性がよく示されてゐる。

プルードンは國家、政治、階級闘爭に對して否定的態度をとり、政治的手段や革命によらずに新しい「經濟聯合體」の組織による平和的な社會再建を提唱した。この經濟聯合體の思想は後に無政府主義および現在の「革命的サンヂカリズム」に影響を及ぼした。一八四七年にマルクスが「哲學の貧困」においてプルードンのブルジョア的社會主義の幻想性と反動性を痛烈に批判したことは周知の如くである。

これまで述べた、三大ユートピアンの後繼者や、ルイ・ブラン、プルードンその他當時の小ブルジョア的社會主義者（ルルー、レイノー等）は、すべて政治闘爭、革命への反對者である點で一致してゐる。「もし革命が私の手の中にあるならば、私は追放されて死に至るとも手を開かないであらう」といふカベーの言葉は彼等の革命憎惡を端的に示してゐる。

然るにこれらの平和的社會主義者と異つた少數の革命的共産主義者が存してゐたことを指摘する必要がある。その代表者は一生の約半分を監獄で過したブランキ（一八〇五＝一八八一）とその盟友デザミー（一八〇三＝一八五〇）である。ブランキは十九世紀三十年代のフランスの多くの共和主義的秘密結社の指導精神であり、彼の結社は三九年に暴動を起して失敗した。彼は理論家といふよりもむしろバブーフの後繼者を以つて任ずる實行家であり、熱烈な革命家として「革命運動を指導する目的で獨裁權力を樹立する」ために武裝反亂の必要を主張した。だが彼はプロレタリアートを革命の支柱

と見なしたとはいへ、それが革命の主導勢力たることを認識せず、少數インテリゲンチャによる指導を考へた。ブランキの功績は、革命的闘爭、蜂起の必要を廣く宣傳した點にあるにかかはらず、その缺陷は大衆との結びつきの必要を意識しなかつた點にある。

ブランキが牢獄に居る間にブランキ主義を宣傳したデザミーは、一八四二年に「財産共有を規制する法典」なる著作において、その理論を展開した。彼は共産主義への途として暴力革命と革命的獨裁を主張し、將來社會に資本や資本家の存在を認めず、無神論者、唯物論者としてサン・シモン主義者の如く宗教を認めなかつた。デザミーの一派は共産主義者＝唯物論者と呼ばれ、先進的勞働者がこれに加はつたが、大なるグループとなりえず、當時のフランスにおいてはルイ・ブランやプルードンの小ブルジョア的社會主義の方がずつと勢力を持つてゐた。當時にとつて先進的であつたブランキやデザミーの革命的共産主義は、資本主義的生産關係の適確な把握とそれに基くプロレタリアートの役割の認識に缺けてゐた點で空想的たらざるをえなかつた。史上最初の社會主義革命の企圖であつた七一年のパリ・コンミューンにおいて、少數派たるプルードン主義者に對抗して多數派としてコンミューンを指導したのはブランキ主義者であつた。

第五章　共産主義＝科學的社會主義

1　共産主義發生の歴史的條件

ここに共産主義と云つてゐるのは、現代の用語例によつてマルクス＝レーニン主義のことである。前章で見たやうに、社會主義といふ名稱は、資本の存在をも認容するが如き社會改良主義をも含めた種々雜多な傾向に對して用ひられてゐる。かやうな用語法によれば、共産主義も社會主義の中に含まれることになる。マルクス、エンゲルスがその教義を共産主義と名づけたのは、當時共産主義は、オーエンやカベーのは別とするも、ブランキやデザミーに見られる如く、最も革命的な傾向の表現であつたからであり、それを科學的社會主義と呼んだのは、從前の空想的社會主義＝共産主義と異つて、マルクスの理論は資本主義から共産主義への移行の客觀的必然性を科學的に解明したからである。またソヴェート同盟の如く、共産主義の第一段階にある社會を社會主義社會と呼ぶのは、そこでは未だ純粋の共産主義は實現せられず、各人は能力に應じて社會から分前を受取るといふやうな「ブルジョアの權利」が保存されてゐるからである。高度の共産主義段階では、各人は能力に應じて與へ、必要に應じて受取るといふ原則が支配しなければならない。

社會主義學說としてのマルクス主義が從前の社會主義と決定的に相異する所以は、それが社會主義の實現の保證を單なる啓蒙や人々の善良な意志に期待せず、又少數革命家の活動にも期待せずに、プルジョアジーに對するプロレタリアートの階級鬪爭の發展の中に見出した點にある。從つてマルクス主義は何よりまづプロレタリアートの理論であり、その階級鬪爭の理論的表現であり、指導理論である。さればその成立はプロレタリアートの或る程度までの階級的生長を前提としてゐる。然らば、マルクス主義發生の時代にかけて、先進諸國の勞働階級は如何なる狀態にあつただらうか？

エンゲルスは、イギリスの産業革命の最も重要な所産はプロレタリアートであり、イギリスの勞働階級の歴史は十八世紀後半に蒸汽機關および棉花加工用機械の發明と共に始まる、と云つてゐる。輕工業において開始された産業革命はマニュファクチュア的手工業者や家内勞働者を壓迫し、彼等は機械によつて大量的に生業を奪はれた。これに對する彼等の鬪爭は機械の破壞（一七六九年には機械破壞を死刑で脅かす法律さへ出た）と機械採用禁止の請願であつた。特に一八一一＝一八一六年における靴下編工の機械破壞運動は全國の靴下編機を破壞するまでに立到つた。だが歴史の進歩に逆行するかやうな鬪爭方法の無效果性は明かであり、やがて勞働階級は機械に對してでなく、機械の資本主義的適用に對して鬪ふべきことを學んだ。

ストライキの形をとつたこの新しい鬪爭方法は、すでに機械に驅逐される勞働者＝手工業者でなく、機械を以つて勞働する工場勞働者、即ち眞の近代プロレタリアートによつて適用された。一八一

八年にはランカシアの織維勞働者の大罷業があり、一八二〇年にはスコットランドにおいてストライキは止むことなく、あらゆる彈壓にかかはらずそれは一八二四年以來普遍的現象となつた。勞働階級のこの盛り上る力は勞働者の結社禁止に關する法律を撤回せしめ、これを轉機として勞働組合は續々と結成され、一八二九年には各種の勞働者を包含せる全國的な「國民聯合」が形成された。

この頃から勞働者の鬪爭は選擧法改革のための政治鬪爭に發展したが、この運動はそれを指導したブルジョア急進主義者の裏切りによつて、ブルジョアジーにのみ有利な選擧法を產んだにとどまつた（一八三二年）。然るに一八三七年の恐慌は勞働者の政治鬪爭をも一段と激化せしめ、三八年には普通選擧法を規定した「人民憲章」（ピープルス・チャーター）獲得のための全國的な運動が開始された。それは三八年、四二年、四八年に特に高潮に達し、やがて凋落した。凋落の原因としては、基本的には、當時上昇的發展を續けてゐた資本主義の下では週期的恐慌の後に來る景氣上昇が勞働者の氣分を軟化せしめたこと、それに關聯して未だ勞働階級が若く、戰術上の過誤を犯したこと、經濟鬪爭との結びつきが弱かつたこと、指導部には多くの小ブルジョア的分子が居て强固な統一がなかつたこと等があげられる。しかし乍ら、勞働階級にとつては政權獲得のための手段にすぎなかつたこの人民憲章のための運動、チャーチスト運動は、世界最初の革命的勞働運動として、マルクス、エンゲルスの理論の形成に寄與したことは著しい。「チャーチストは極めて遲れており、極めて未發達であつた、だがその代り心身ともにプロレタリアであり、プロレタリアートの眞の代表者であつた」と彼等は批評

してゐる。レーニンも「この時代のイギリスの勞働運動は將來のマルクス主義の中の多くのものを天才的に豫感したと」云ひ、それを一八四八年六月、パリ・コンミューン、一九〇五年の經驗と共にプロレタリアートに對する貴重な教訓としてあげてゐる。「共產黨宣言」におけるマルクス、エンゲルスの階級鬪爭の戰略戰術論は著しくチャーチストの經驗の分析に依據してゐる。

イギリスに次いで緩慢ながら產業革命の時代に入つたフランスでは、一七八九＝九三年の大革命以來政治的意識の昂まつた人民は、一八三〇年にはナポレオン沒落後の反動的封建的王朝を顚覆し、大ブルジョアジーを代表するルイ・フィリップの王朝がこれに取つて代はつた。その翌年には機業の中心地リオンに手工業者＝家內勞働者の一大暴動が起り、また三〇年の革命において共和主義のために鬪つた勞働者や小ブルジョアジーの間には幾多の結社が生れ、これに吃驚した政府の結社禁止法に對して、三四年にはリオンの勞働者は武裝蜂起によつて自己の組織を守らうと企て、蜂起は他の都市にも波及した。この蜂起の武力による鎭壓の後、勞働者や手工業者の間には多くの秘密結社が作られ、その指導者にはブランキの如き革命家があつた。他方、ルイ・ブランやプルードンの小ブルジョア的社會主義が勞働者の間に影響力を持ち、またサン・シモン派やフーリエ派の活動も見られた。一八四三年にパリに亡命したマルクスは、ここでフランスの革命家や社會主義者と交はり、社會主義の研究に多大の刺戟を與へられた。

フランスよりも更に資本主義の後れてゐたドイツでは、當時漸く四八年の革命に向つてブルジョ

民主主義が成熟しつつあつたが、グリューン（一八一七＝八七）やワイトリンク（一八〇八＝七一）の「眞正社會主義」が生れてゐた。マルクス主義の確立にはこの「眞正社會主義」やプルードン主義に對する批判が結びついてゐる。

以上のやうな歴史的背景に加へて、なほ理論の建設のためには前代から傳へられた思想的材料が必要であつた。これらの材料、源泉として、レーニンはドイツ古典哲學、イギリスの經濟學、フランスの社會主義をあげてゐる。

ドイツ古典哲學はドイツの歴史的後進性を反映して、宗教および封建制との妥協の精神を以つて貫かれ、イギリス人やフランス人にあつて社會的、政治的に自主性を持つものと主張された個人は、ドイツ人にあつては道德の主體＝人格へと抽象化され（カント、フイヒテ）、イギリス人やフランス人が人間の自由のために戰つてゐるときに、ドイツの哲學者は抽象的な「精神」（現實的人間から切離されて絶對化された精神）が自然による拘束やその有限性による不自由を克服して自由なる主體としての自己の本然を實現する過程を夢想した（フィヒテ、シェリンク、ヘーゲル）。この過程は自我と非我、精神と自然、意識と對象等の對立物の鬪爭の過程として考へられ、ここからヘーゲル（一七七〇＝一八三一）によつて大成された辯證法が展開された。

辯證法はすべてのものを靜止、固定の相においてでなく、發生と消滅、變化、運動、發展において考察することを敎へ、すべてのものにはそれを沒落せしめる否定の契機が含まれ、低きより高きに向

ふ發展は現在支配してゐる肯定的契機に對する否定的契機の勝利によつて行はれることを敎へる。本來革命的な原理を含んでゐるこの辯證法は、ヘーゲルにあつては絶對精神＝絶對理念の實現、その自主性＝自由の確立の運動の形式として、極めて抽象的觀念論的に歪められ、しかもこの絶對精神は歴史的には當時のプロシアの封建的絶對主義的支配の下で完全な實現、自由に到達するものとされた。

この觀念論はヘーゲルの死の十年後にはフォイエルバッハ（一八〇四＝七二）の唯物論の宣揚によつて葬られたが、マルクスはヘーゲル哲學から辯證法を取り出し、これを唯物論的に改作し、合理化して、社會過程の考察にこれを適用し、すでに一八四三年（「ヘーゲル法律哲學批判序說」）には近代社會の否定的側面を代表するプロレタリアートの世界史的役割を發見した。彼はここで「プロレタリアートが從來の世界秩序の解消を告知するとき、彼はただ彼自身の存在の秘密を語つてゐるにすぎない、何となれば彼はこの世界秩序の事實上の解消であるから」と云ひ、ドイツの「解放の頭腦は哲學であり、心臟はプロレタリアートである」と斷定してゐる。

このやうな結論は、同時に、マルクスが一八四二＝四三年に「ライン新聞」の記者として、人民の物質的利害の問題に專念し、その結果、階級鬪爭、國家形態、イデオロギーの秘密は經濟にあり、社會の經濟的構造がそれらのものを規定するといふ唯物史觀に到達したことに關聯してゐる。蓋し辯證法によれば、一切の發展は事物の內在的矛盾の故に行はれるといふとき、唯物史觀の見地からは、プルジョアジーとプロレタリアートの對立、鬪爭が近代社會の經濟的構造における矛盾の表はれとして

把握され、この矛盾の解決が對立の否定的側面たるプロレタリアートの勝利の中に見出されることは必然的だからである。

かくして資本主義的經濟（生産）關係、その矛盾の分析の必要を痛感したマルクスは、パリにおいて經濟學の研究に着手し、スミス（一七二三＝九〇）に發し、リカード（一七七二＝一八二三）によつて確立された勞働價値說を徹底させて、資本主義經濟の秘密たる剩餘價値を發見した。エンゲルスも云つた如く、唯物史觀と剩餘價値說といふ二大發見によつて社會主義は空想的なものから科學的なものとなつた。

勞働價値說によれば、商品の價値はその生産に要する社會的必要勞働時間によつて決定される。マルクスはこの理論を商品としての勞働力に適用し、勞働力の價値（賃銀の基準）が勞働力の生産＝再生産、即ち勞働者の家計、又全體としては勞働階級の存續に必要な勞働量（時間）によつて規定されることを見出し、勞働者の生産する商品の價値がこの勞働力の價値より大であり、この餘剩分、即ち剩餘價値が資本家の利潤の源泉であり、資本主義的生産は剩餘價値の生産を樞軸として展開されるといふことを發見した。平易に云へば、勞働者が資本家のために一日十二時間勞働し、その半分の六時間の勞働によつて生産される生活必需品で生計を維持できるとすれば、それが賃銀の額を決定し、殘りの六時間分の勞働の成果は資本家に搾取されるのである。人間の勞働が自己の生存に必要なより以上のものを生産しうることは、奴隷や農奴の場合には一目して明白である。然るに資本家と勞働者の

自由な契約に基づく資本主義的雇傭關係の下では、この搾取の事實は見落され、かくてブルジョア學者は企業の組織者としての資本家への正當な報酬であるかに考へてゐる。

もちろん、搾取の事實の單なる確認は、「財産は盜奪」だと云つたプルードンの見解を科學的にしただけであつて、そこから資本主義崩壞の必然性は出て來ない。マルクスの剩餘價値說の功績は、資本主義の發展が剩餘價値の擴大再生産の過程であり、それによつて同時に資本主義社會の矛盾がますます深化、擴大し、遂にプロレタリアートの勝利に導くべきことを發見した點にある。

以上のやうな、辯證法および勞働價値說と並んでマルクス主義の生成に寄與した空想的社會主義については、先きに述べたところである。この社會主義は、近代社會の矛盾に關してマルクスを啓發したであらうし、また近代史を有閑階級と生産階級の鬪爭史と見たサン・シモン等の見解は、プロレタリアートが階級的獨立性を示した三〇＝四〇年代には、資本主義社會の發展をブルジョアジーとプロレタリアートの鬪爭の見地から捉へることを示唆したであらう。

すでに一八四五＝四六に書かれたマルクス、エンゲルスの共著「ドイツ・イデオロギー」はマルクス主義の世界觀の基礎的方面の完全な展開を示し、四八年に出た共著「共産黨宣言」は戰略戰術論に至るまでの完成を示してゐる。

2　共産主義理論の基礎

すでに四三年にマルクスが哲學とプロレタリアートの不可分な結合にドイツの解放の保證を見出した如く、マルクス主義の根本特徴は理論と實踐、哲學と政治の統一にあり、その哲學的唯物論と經濟學と社會主義學說は不可分な全體を成してゐる。

從來の唯物論は化學や生物學の未發達のために、主として力學に依據し、力學的(機械的)運動に基いてすべてを說明する機械論であり、自然および社會の考察に發展の見地を適用しえない反辯證法的なものであつた。それは、「人間の本質」を抽象的に自然的存在として捉へたために、社會生活をこの自然的人間の頭腦の所產たる思想や衝動から說明する觀念論に陷り、社會發展の物質的客觀的基礎を成す經濟の意義を理解しえず、經濟關係の擔ひ手たる人間＝主體の實踐的活動の意義を理解しなかつた。

舊唯物論のこれらの缺陷はマルクスの辯證法的唯物論および史的唯物論(唯物史觀)によつて除去され、唯物論は新たな段階に高められた。

辯證法的唯物論は、唯物論としては、意識に對する存在の根源性を主張し、意識は自然の發展の生物的段階の所產であり、それは外界、環境を主體內に反映せしめることによつて主體の合目的的活動を方向づけるといふことを主張する(模寫論)。だが同時にそれは辯證法的に、外界のこの反映、模寫はつねに不完全であり、制限されてゐて、人類は技術と產業の進步に基いてます〳〵この模寫を正確、豐富、深刻ならしめ、かくて相對的眞理から絕對的眞理にます〳〵近迫するといふこと、云ひかへれば、認識は實踐による、新たな對象領域との接觸、檢證を通して發展するといふことを確認する

(實踐的唯物論)。ここで認識が主觀と客觀の矛盾による發展として考察されてゐるやうに、一般にすべてのものを矛盾による運動、發展において捉へるのが辯證法である。辯證法とは本來的には外界並びに人間の思惟の運動、發展の一般法則であつて、思惟の運動、認識は外界の運動を反映するものであり、そしてこのことを意識し、この意識に基いてかの一般法則を究明しようといふのが理論としての唯物辯證法である。

社會、歷史の領域に適用された辯證法的唯物論即ち唯物史觀は、社會に內在してその基礎となる根源的なものを、唯物論的に、人間の物質的生活の生產＝經濟の中に見出し、この基礎が上層建築(國家、イデオロギー等)と交互作用しながらも結局決定的なものであることを確認し、同時に辯證法的に、社會發展の推動力を、基礎たる經濟的構造そのものの內部における生產力と生產關係の矛盾に見出してゐる。生產力とは自然への人間の働きかけの要因であり、勞働對象(勞働によつて捉へられる自然を根源的なものとして含む)、勞働手段、勞働力から成り、生產力の運動はつねに一定の歷史的な人間關係、即ち生產關係の下で遂行される。或る生產關係の枠內で生長した生產力にとつて、もはやその生產關係が不適宜なものとなり、一層の生長の桎梏となるとき、生產力と生產關係の衝突が起り、生產關係、從つてその總體としての社會の經濟的構造は變革され、それに伴つて全上層建築も或は急激に、或は徐々に變革される。封建制から資本主義への移行に當つては、發展する生產力の代表者は勞働力の直接の擔ひ手たる農民、勞働者およびこの後者に依存するブルジョアジーであり、資本主義

から社會主義への移行に當つては勞働者の階級である。このやうに階級社會においては、勞働力の所持者の階級とその搾取者の階級が敵對的な生產關係を形成し、生產力と生產關係の矛盾も敵對的性質を帶びてゐる。この矛盾、敵對的矛盾は、生產力の、從つてまた一般的には全社會の發展の推動力であると共に、一定の段階に至つてその桎梏に轉化し、社會革命を招來する。

資本主義の下でこの矛盾が如何にして生產力發展の推動力となり、如何にして桎梏となるかといふことは、資本主義の生產力がその運動において取るところの社會的形式、即ち資本主義的生產關係の分析によつて解明さるべきである。これが經濟學の任務である。

マルクスの經濟學は既述の如く、資本主義的生產關係の核心を剩餘價値の中に見出した。剩餘價値の生產は、商品生產が一定の發展段階において、一方に多額の貨幣の所有者と、他方に自己の勞働力を賣るより以外に生計の途のない勞働者を生ぜしめ、貨幣が生產のための資本となり、その所持者が勞働者の勞働力を商品として購入し、これを市場のための商品生產に使用するときに發生する。

その場合、資本家の關心は專ら、剩餘價値の增大といふことに向けられる。それは第一に、勞働時間の延長による絕對的剩餘價値の增大の試みとなつて現はれるが、これは勞働者の生理的條件や反抗によつて一定の限界を超えることはできない。そこで資本家の努力は、必要勞働時間（即ち勞働力の價値に該當する勞働時間）の短縮、云ひかへれば勞働の生產性の向上によつて、剩餘價値をより多く捻出することに向けられる。この相對的剩餘價値の增大の努力は、歷史的には單純協業、分業に基くマ

ニュファクチュア、機械による大工業として相次いで出現した。このやうにして資本主義の下における勞働の技術的組織、技術、生產力の發展は、ひとえに、勞働者と資本家の敵對的關係＝搾取關係を意味する剩餘價値の生產の形で行はれ、技術（勞働手段の體系）の進步において對象的形態をとつて現はれる生產力の發展は、生產力の主體的要因としての勞働力の擔ひ手たる勞働者と資本家の敵對的生產關係、從つてまた生產力と生產關係の敵對的矛盾を原動力として行はれるものである。

ところで資本家が利潤として收得する剩餘價値は、すべて彼の個人的消費に費されるのでなく、その一定部分は更に資本として次の生產に投下される。かくして擴大再生產が行はれ、ます〳〵多くの利潤を手に入れる資本家の許には富が集積し、資本の蓄積が進行する。この資本主義的蓄積は、土地からの農民の「解放」による「自由」勞働者の創出、租稅、國債、保護關稅、殖民制度等によつて資本主義を創生乃至育成する所謂資本の原始的蓄積と異つて、資本の自己增殖であり、この蓄積過程において、手工業者、小經營者は零落し、新たな機械によつて驅逐される工場勞働者と共に「產業豫備軍」を形成する。勞働者のこの相對的過剩、「資本主義的人口過剩」は、勞働力の價格（現實の賃銀）を價値以下に低落せしめ、生產手段（勞働對象プラス勞働手段）の形における增大せる蓄積資本と共に、資本家に生產擴張のます〳〵廣汎な可能性を與へる。生產手段の私有に基く、從つて社會的計畫性のないこの社會的（市場向け）生產の擴張は、大衆の購買力を凌駕するに至り、週期的に恐慌に遭遇する。

恐慌は資本主義的生產の矛盾の一時的な自働的暴力的解決であつて、これを轉機として生產はまた

上昇に向ふとはいへ、この經濟循環は決して同一のもののくり返し、又は量的に擴大された規模でのくり返しではない。レーニンは、くり返される恐慌が、自由競爭の資本主義の、獨占資本主義＝帝國主義、「死滅する資本主義」への轉化の基礎たる、資本の集積、集中を加速化することを指摘してゐる。即ち、恐慌の度毎に、ます〳〵少數の資本家への資本の集積、集中が加速化され、他方に無所有プロレタリアの數と力は增大するのである。

かくして剩餘價値の生產に立脚する資本主義の敵對的矛盾は、如何なる個人の善意によつても、改良政策によつても決して解決されないのみか、深刻化の一途を辿るのみである。「資本豪族の數の斷えざる減少と共に、貧困、壓迫、隷屬、墮落、搾取の量は增大する、だがまた不斷に增加し、資本主義的生產過程の機構そのものによつて、自ら敎育された、團結し組織された勞働階級の反逆も增大する。資本の獨占は、それと共に且つそれの下で繁榮した生產樣式の桎梏となる。生產手段の集中と勞働の社會化は、その資本主義的蓋被と和解できなくなる點に到達する。この蓋被は爆破される。資本主義的私有財產の弔鐘が鳴る。收奪者が收奪される」。

「資本主義的生產樣式から出てくる資本主義的擅有樣式、即ち資本主義的私有財產は、個人的な、自身の勞働に基いてゐた私有財產（手工業者の小所有、農民の所有―筆者）の第一の否定である。だが資本主義的生產は自然過程の必然性を以つてそれ自身の否定を生む。それは否定の否定である。これは再び私有財產を恢復するものでなく資本主義時代の達成を基礎とする即ち協業と土地および勞働そのものによつて生產された生產手段の共有とを基礎とする個人的財產を恢復する」（「資本論」第一卷第二十四章）。

このやうにマルクスは資本主義から社會主義への移行を前者の內的矛盾の發展による自然必然的な過程として把握することによつて、眞に科學的な共產主義理論を確立した。ここで大事なことは、マルクスが資本主義そのものの中で社會主義社會の生誕の客觀的前提と主體的條件が準備されることを指示してゐる點にある。

これらの客觀的前提の中最も基本的なものは、生產手段を基本的なものとして含む資本の集積、集中（帝國主義時代には金融資本の支配下のトラスト、カルテル等の形態をとる）と、資本家の下における勞働者の協業、土地および勞働手段の共同的使用の形における「勞働の社會化」である。これは細分された無數の經營、そこで單獨に、又は少人數で働く無數の勞働者の存在と異つて、生產手段の國有の下では生產の社會的計畫化を極めて容易ならしめるものである。次に資本主義は、工業と農業を分離し、兩者の發展を不均等ならしめ、農業における資本主義の發達は工業のそれよりも通常著しくとり後れるとはいへ、高度の農業技術の造出によつて、社會主義の下における工業と農業の結合、農業への高度技術の適用とそれに基く農業勞働の集團化＝社會化のための前提を作り出し、これによつて將來社會における農村の文化的とり後れの克服の可能性を與へる。更に資本主義は、父家長的家族制を破壞し、婦人や未成年者を家庭から工場に引き出し、これを無慈悲に搾取すると同時に、彼等の人格的、經濟的獨立性を高めることによつて、將來における家族や兩性關係のより高い形態の經濟的基礎を創造す

る。同様に兩性および種々の年齢の個人から「結合勞働總員」を編成することは資本主義の下では隷屬と頽廢の源泉である半面において將來における個人の「人間的發達」の源泉に轉化しうるものである。

このやうに資本主義はその内部に社會主義のための客觀的前提を造り出す。だがこのことは決して資本主義から社會主義への自然成長的轉生や資本主義下における社會主義的生産關係の生長を意味するのではない。資本主義的生産關係は初め封建制の胎内に自然發生的に起り、一定の生長段階に至つて封建的桎梏を革命的に打破して、一層の發展のための社會的條件を造り出した。然るに資本主義の下では社會主義の前提、可能的基礎が準備されるのであつて、社會主義的生産關係そのものは現代の「社會主義者」が考へるやうに決して生長しない。

この可能的基礎を現實的基礎たらしめるには、即ち社會主義實現のためには、先づ資本主義が變革されなければならない。そしてこの變革の遂行者たる勞働階級の革命的力、云ひかへれば社會主義革命の主體的條件も、資本主義の發達につれて成熟するのである。これらの主體的條件の成熟は、基本的には、「勞働の社會化」に基く勞働者の量的にも質的にも生長する團結として現はれる。資本家と異つて利害の國際的對立を有しない勞働者にあつては、この團結は國際的規模にまで擴大される。次に資本主義が自己の必要のために青少年に施す教育は、一方では彼等を畸形化し、生産過程の奴隷たらしめると共に、他方では彼等の知的能力を高めることによつて、將來社會における人間の全面的發達の基礎を作り出し、また資本主義批判の知的可能性を與へる。

かくして團結せる勞働者は先づ資本家に對する經濟鬪爭に入り、次いで政權奪取のための政治鬪爭の段階に進入する。この過程において主體的條件の中最も主體的なものとしての革命的理論の役割は重大であり、それは勞働階級に對するブルジョアジーの思想的影響に對してイデオロギー戰線で鬪ひながら、鬪爭を指導して行かなければならない。社會主義革命のための主體的條件の眞の確立とは、革命的理論によつて武裝した勞働階級の黨と、その影響下にある多數の組織(勞働組合、農民組合等)の形成に外ならない。

資本主義の崩壞が自然的必然性を持つてゐるといふことは、ブルジョア學者が非難した如く、何ら勞働者の組織の積極的意識的活動に矛盾するものではない。ブルジョアジーに對するプロレタリアートの階級鬪爭、主體的條件の成熟に伴ふこの鬪爭の意識化、積極化は、それ自身資本主義社會の過程の必然性の内容を成してゐるのである。この必然性が無數の攪亂的偶然性による幾多の迂路や躓きを避けて、より容易に、より速かに實現される上において、必然性の内容の主體的方面を成す諸條件の强化が極めて積極的な意義を持つことは自明である。

このやうにしてプロレタリアートの組織の强化は、それに對する革命的理論の浸透、指導力の强化を不可缺な要素として包含する。これがために理論は、勞働者の日常鬪爭から共産主義實現のための政治鬪爭に至るまでの一切の階級鬪爭の指針たりえなければならない。そこでこの革命的理論(即ちマルクス＝レーニン主義)にとつては特に現代には、革命の理論や戰略戰術論が決定的に重要なものとなる。

革命の理論において肝腎なのは、當面の革命の型の解明である。これらの型には、高度資本主義國における、もはやブルジョア民主主義的課題を有しない純プロレタリア革命、中位の資本主義國における、ブルジョア革命の廣汎な課題を包含するプロレタリア革命と、プロレタリア革命に轉化しうるブルジョア革命、殖民地や隷屬國における、獨力では容易にプロレタリア革命に轉化できないブルジョア革命（外國資本からの解放をも含む）がある。しかしながらこの後者もプロレタリア獨裁國や國際プロレタリアートの援助の下に、社會主義に進入することが可能である。非常に後れた狀態にある民族すら、かやうな條件の下では社會主義的發展の途に入りうることは、ソヴェート同盟内にある中央アジアやシベリヤの少數民族の例が示してゐる。

革命の勝利に導くのための黨の戰略的目標としては——各國の革命の型に從つてどの目標に特に重點が置かれるかの相異はあるとしても——一般的には次のものがあげられる。まづ勞働階級の多數者を黨の影響下に獲得することがそれであり、このためには廣汎なプロレタリア的大衆組織、特に勞働組合を自己の影響下に獲得することが必要である。次に廣汎な勤勞大衆（都市貧民、下層インテリ、小ブルジョア層）に對するプロレタリアートのヘゲモニーを實現することが肝要であり、特に農民の獲得は（就中ブルジョア革命の任務を有する國では）重大な意義を有する。更に帝國主義諸國においては殖民地民族や被抑壓民族の解放運動を支持し反對に殖民地や隷屬國においては帝國主義諸國のプロレタリアートとの同盟において外國資本と鬪爭し國内の民主主義的農業革命を指導しなければならない。

戰術は、その時々の情勢——客觀的情況および主體的條件の總體——の分析に基いて戰略的目標の線に沿つて、出來るだけ多くの大衆を出來るだけ高い鬪爭水準に組織することを目標として決定されるものであつて、種々のスローガンの宣傳や大衆運動（ストライキ、デモ、選擧戰等）の組織がこれに屬し、現在日本で云はれてゐる單一勞働組合、單一農民組合の結成、民主主義戰線の結成等も戰術の部面におけるものである。最後にプロレタリアートの戰術において帝國主義戰爭への反對は極めて重要な地位を占めてゐる。この戰爭が終つた現在の日本では、軍國主義者、戰爭の指導者、積極的協力者への徹底的追擊を包含する、國の民主主義的再建によつて、將來におけるファシズム、帝國主義的反動の擡頭の經濟的、社會的、政治的可能性を一掃しなければならない。

3 レーニン主義

マルクス、エンゲルスが活動した時代は資本主義が未だ上昇期にあり、プロレタリア革命が現實に成熟してゐない時代であつた。然るに「死滅する資本主義」、「社會主義革命の前夜」としての帝國主義の段階への資本主義の進入は、プロレタリア革命の前提條件の成熟に伴ふ一聯の新たな問題を提起した。これらの問題をマルクス主義の文字に拘泥せずに、その本質、方法に基いて正しく處理し、第二インタナショナルの指導部の日和見主義（ロシヤのメンシェヴィズムもこの傾向）を初め、種々の偏向との鬪爭において、マルクス主義を新時代の諸條件の下で眞に生きた革命的理論として發展せし

めたのはレーニンである。

「レーニン主義は帝國主義およびプロレタリア革命の時代のマルクス主義である。より正確には、レーニン主義は一般にはプロレタリア革命の理論および戰術であり、特定的にはプロレタリアート獨裁の理論および戰術である。マルクスおよびエンゲルスは…プロレタリア革命が未だ直接の實踐的不可避性でなかつた時代に活動した。ところがマルクスおよびエンゲルスの門弟たるレーニンは、發達せる帝國主義の時代、プロレタリア革命がすでに一つの國において勝利し、ブルジョア民主主義を粉碎して、プロレタリア民主主義の時代、ソヴェートの時代を開いた、展開しつつあるプロレタリア革命の時代に活動した。さればこそレーニン主義はマルクス主義の一層の發展である」(スターリン「レーニン主義の基礎」)。

レーニンによつてマルクス主義の寶庫に持込まれたものは、マルクスによつて與へられたすべてのものの、新時代に適應しての一層の發展であり、マルクス、エンゲルスが取扱つた重要なテーマで、レーニンによつて取上げられ、一層展開されなかつたものは殆んどない。これを列擧すれば、哲學においては、模寫論の詳細な展開、認識論としての辯證法の確立、辯證法の核心としての對立物の鬪爭の法則を中心とする諸法則および諸範疇の解明(ヘーゲル辯證法の批判的研究および具體的分析と革命的實踐への辯證法の適用に基く)、帝國主義時代の物理學の危機の批判による自然辯證法的研究、哲學および理論一般の黨派性の觀念の確立、客觀主義の克服、經濟學においては、資本蓄積論の解明、

ロシヤ資本主義の發達の研究、農業問題の全面的處理、就中重要なのは帝國主義の分析、社會主義理論や戰略戰術の方面においては、プロレタリア獨裁およびこれに關聯してブルジョア革命のプロレタリア革命への轉化の問題の徹底的解決、農民問題、殖民地問題、黨の建設、日和見主義の社會的根據の問題、共產主義內の偏向との鬪爭問題の解決等々である。

ここで就中注目すべきは、經濟學の領域において、すでにマルクスによつて完全に展開された基礎理論に關してはレーニンに殘されたことは主としてその歪曲に對して鬪ふことであつて、新たなものを附加する餘地はなかつたのに反して、マルクス、エンゲルスの遭遇しなかつた發達せる帝國主義の分析といふ重大な課題がレーニンに課せられたことである。

自由競爭の資本主義からその反對物として生れ、自由競爭の上に、且つそれと相並んで存在する獨占資本主義=帝國主義の下では、資本の巨大な集積、獨占的集中によつて社會主義のための客觀的前提が大規模に作り出されると共に、工業諸部門間、工業と農業、諸國間における資本主義發達の不均等性はます〳〵脅威的なものとなる。

帝國主義は、國內的には、獨占價格、保護關稅、市場の獨占等によつて大衆を壓迫し、後れた工業部門や農業、一般に小經營を一段と强く抑壓し、ます〳〵增大する被抑壓者の反抗に備へて政治的に反動化する。對外的にはそれは、殖民地搾取の强化、外國市場、資源の獨占、資本輸出の努力へと突進する。列强間のかかる競爭は、先進資本主義國と後進資本主義國の力の均衡の破壞の中に表現され

る、發達の不均等性の結果、すでに殖民地や「勢力範圍」の分割が完了してゐる帝國主義時代には、世界再分割のための闘爭に導かざるをえない。

帝國主義時代における資本主義の矛盾のこうした激化は、舊ロシヤの如く、帝國主義と封建制の絡み合ひによる二重の矛盾の故に、世界帝國主義の最も脆弱な一環を成してゐた國において、先づ帝國主義を打破するといふ可能性を作り出した。そして帝國主義列强間の矛盾と、世界プロレタリアートの支援とは、一國における社會主義建設の可能性を與へてゐる。「創造的マルクス主義者」としてのレーニンの偉大なる點は、社會主義革命は最高度に發達した資本主義國に先づ起らねばならぬと主張する空論的マルクス主義や、先進諸國における勝利せる革命の側からの支援なくしては一國の社會主義建設は不可能であると主張するトロツキー主義の誤謬に陷ることなく、帝國主義の現象の科學的把握に基いて斷固としてロシヤの社會主義革命を勝利に導き、プロレタリア獨裁を樹立した點にある。

從つてレーニン主義における最も決定的なものはプロレタリアート獨裁の諸問題の究明であり、これに關聯する戰略戰術であると云ふことができる。レーニン主義の他のすべての內容も、この決定的なもの、中心的なものとの聯關において理解されなければならない。レーニン主義は帝國主義およびプロレタリア革命の時代にマルクス主義がとつた必然的な發展形態に外ならない。

現在スターリンの指導下に理論的、實踐的に一層發展せしめられてゐるレーニン主義を知ることなしには、共產主義を理解することはできない。

第六章　現代の社會主義

1　現代社會主義の階級的基礎

ここに「現代の社會主義」と云ふのは、第四章で見たやうな小ブルジョア的社會主義の流れを汲むものや、現在の語義における社會民主主義（第二インタナショナルの「マルクス主義」）や、無政府主義等のことである。

かうした社會主義が資本主義諸國の勞働階級の間に普及し、勞働組合の指導理論となつたり、勞働者の間に影響を有する種々の「社會黨」の指導精神となつてゐるのは、決して偶然でなく、それには深い社會的原因がある。この社會的原因は、どの國にもプロレタリアートと並んで多數の「中間層」小ブルジョア（農民をも入れて）が存在するといふことである。特に小手工業者＝小經營者は資本主義によつて斷えずプロレタリアに零落せしめられると共に、また斷えず新たに工場の下請業者、資本に隷屬する家內勞働者、大工業に附隨する小經營者等の形で再生される。これらの沒落する小經營者が、小ブルジョア的世界觀を以つて勞働者の隊列內に參加してくることが、現代「社會主義」の極めて重要な社會的根據を成してゐるのである。

特に勞働階級の運動が、比較的平和的に進み、廣汎な大衆がこれに參加してくるときには、小ブルジョア的世界觀の影響が浸透してくることは避けられない。

このやうに運動が比較的平和的に進捗するといふことは、支配階級の政策に著しく依存してゐる。支配階級が自由主義の政策をとるときには、さうした進捗が見られ、一方、多數の小ブルジョア的分子が運動に加はると共に、他方指導者の間には議會主義、合法主義、改良主義による社會主義の「平和的」實現を空想する日和見主義が生じてくる。このことは、ブルジョア革命が終はり、資本主義が上昇的に發展してゐた國および時代に廣く見られた現象である。特に、世界經濟において獨占的優位を有する先進資本主義國では、殖民地や半殖民地から取得する過大利潤によつて勞働階級の上層部分の懐を肥やし、これらの「勞働貴族」を媒介として勞働者の間にブルジョア自由主義的影響を注入することができる。エンゲルスは、すでに十九世紀五十年代におけるチャーチスト運動沒落後のイギリスに關してこのことを指摘してゐる。また一八七一年における西歐のブルジョア革命の終結から、一九〇五年に再び革命の嵐が東方から吹き始める迄の、資本主義が大體において上昇的に發展してゐた（二十世紀初頭にかけて帝國主義への轉化を始めながら）時代には、勞働運動は「平和的」進捗を見せ、第二インタナショナルの日和見主義を生んだ。

他面において、支配階級が勞働運動に對して暴力的彈壓を加へるときには、運動の內部に小ブルジョア的急進主義の現はれたる無政府主義の如き「極左的」偏向を生ぜしめ（一八八〇年代初めのドイ

ツ）、またこの彈壓を避けんがために合法主義の看板の下に、專ら右翼化する日和見主義的指導者を輩出させる（戰前の日本）。

更に、經濟的關係の後れてゐる國においては、勞働運動內に小ブルジョア的分子が數多く見出され、これが非プロレタリア的世界觀の導體となることは云ふ迄もない。

最後に、資本主義の發達が幾多の矛盾した面を示してゐることは、これらの矛盾面の中の一つにのみ固執する一面的な理論を發生させる。例へば、資本主義の下で社會主義の客觀的前提が作り出されるといふ一面のみを見て、これらの前提の造出にもかかはらず資本主義は革命的飛躍なしには社會主義に轉化しないといふことを見落す者は、改良政策による社會主義への平和的漸進を考へる。又反對に、資本主義の否定的破壞的面のみを一面的に誇大する者は、資本主義の與へる種々の可能性を利用しようとせず、議會をすら害惡として斥け、一般に政治を否定することとなる（アナルコ・サンヂカリズム）。

これらすべての非マルクス主義的、非プロレタリア的傾向は、小ブルジョアジーをその階級的基礎に有しており、勞働階級の陣營につねに加はつてくる小ブルジョア的分子を導體として、勞働者の間に普及されるものである。それらの傾向は、大別すれば修正主義（改良主義、日和見主義）と無政府主義（アナルコ・サンヂカリズム、無政府社會主義）に分れることをレーニンは指摘してゐるが、前者はマルクス主義の「修正」の名の下に現はれたもので、現代のすべての「社會黨」「勞働黨」と同一

部類のものであり、後者は政治（從つてプロレクリア獨裁）の否認を特徴する。マルクス＝レーニン主義は、マルクスの時代以來あらゆる種類の日和見主義や無政府主義との鬪爭の中に生長した。

第一次世界戰爭と共に始まり、ソヴェート同盟における社會主義體制の出現によつて決定的となつた資本主義の一般的危機の時代には、資本主義的關係の不安定、ルムペン化した多數の分子の存在、都市「中間層」の貧困化、農村小ブルジョアジーの不滿の增大、プロレタリアートの大衆的進出の脅威等の條件下にあつた帝國主義國においては、ブルジョア的反動はファッシズムの姿をとつて現はれた。ブルジョアジーの手先たるファシストは、プロレタリアートの進出を暴力的に彈壓すべく政權を獲得するために、後れた小ブルジョアジーの不滿を利用した。卽ち彼等は、反ユダヤ主義、反金權主義（日本では更に「反資本主義」）等の社會的デマゴギーの撒布によつて「中間層」をごまかし、その支持を獲得した。この過程において、社會民主主義（日和見主義）は、その反共產主義的態度によつてファッシズムを助長し、時には直接にファッショ的役割をすら演じた。日本では、現社會黨の一部幹部が、大資本と結托した軍國主義者の「反資本主義」のデマゴギーを勞働者の間に持込み、軍國主義的ファシスト體制（「新體制」）の確立に協力し、勞働組合の解體（產業報國會の設立）にすら積極的に助力して、完全にファシストの役割を演じたことは、萬人の記憶に新らしい。

今やファシスト＝軍國主義者は沒落し、情勢は一變した。だが右の事實は、プロレタリアートにとつて最も重大な瞬間に、日和見主義が如何なる役割を演じうるかをよく示してゐる（一九一九年のドイツ革命における社會民主主義の裏切りについては說明するまでもない）。

2　現代社會主義の諸流派

第一次世界戰爭の末期以來、わが國において、米騷動（一九一八）に見られた勞働者や勤勞大衆の不滿は、やがて勞働者の鬪爭を議會主義の狹路に誘導せんとするブルジョアジーによつて利用された普選運動を生むと同時に、勞働運動の昂揚に導いた。これに關聯して、思想界にはマルクス主義と共にギルド社會主義、サンヂカリズムおよびこれに近い無政府主義等が紹介され、後の二者は日本共產黨の創立（一九二三年）の前後まで勞働者の間に一時或る影響を持つてゐた。その後勞働組合の指導精神からサンヂカリズムは消え、無政府主義者は小なるセクトとして存續し、今日では全く意義を失つてゐる。

從つてこれらのものについて述べることは大して意味を有しないが、一應說明を加へておく。

ギルド社會主義は二十世紀のイギリスに起つたもので（コール、ホブソン、ペンティ等）手工業的組織と資本主義、無政府主義的非集權主義と國家資本主義的集中との折衷の試みであり、賃銀制度廢止の目的の下に、勞働者、インテリゲンチヤ等を產業「ギルド」の聯合體へ結成させ、これを平和裡にブルジョア國家の枠內で產業管理の機關に轉ぜしめんとする一派である。それは超階級的國家の下にある「職業民主主義」の觀念によつてイクリー・ファシストの「職能的」「組合國家」の思想に影響

した。

現代の無政府主義は、プルードンと、やはり彼と同じくマルクス主義の確立過程において痛烈に批判された哲學的無政府主義者(觀念論的徹底的個人主義者)シュチルネル(一八〇六=五六)に發し、第一インタナショナルにおけるマルクスへの猛烈な反對者であつたバクーニン(一八一四=七六)によつて確立され、二十世紀にはクロポトキン(一八四二=一九一九)を最大の代表者に持つた。日本において大杉榮氏や石川三四郎氏によつて宣傳されたこの理論は、個人の抽象的「自由」の名において一切の權力を否認する見地から、勞働運動の中央集權的組織やプロレタリア獨裁に徹底的に反對することを特徴としてゐる。その「共産主義」はブルジョア的個人主義と小ブルジョア的平等主義(プルードン)に基いたものである。權力(「權威」、政治、國家)を否認する無政府主義者が大衆を組織しえず、個人的英雄主義やテロリズムに訴へるより外ないこと、彼等が現在國際的にも單なるセクトと化してゐることは當然である。

十九世紀末にやはりプルードンやバクーニンの思想的影響下にフランスに發生した「革命的」サンヂカリズムは、無政府主義と同じく、政治鬪爭(特に議會鬪爭)、プロレタリア獨裁を否定し、勞働者の非集權的な組合(サンヂカ)の自由な聯合體による「直接行動」(總罷業)の中に自己の實現手段を見出してゐる。それはプロレタリアートの黨と獨裁、强固な勞働組合の否定、大衆の日常鬪爭の輕視の點で極めて反革命的であり、フランスにおいて多年勞働組合と政黨の有害な分離の原因となつた。

日本社會黨の所謂右翼派(元社會民衆黨系)のイデオロギーに著しく影響してゐるものとして注目さるべきは、元イギリス勞働黨主マクドナルド一派の「建設的社會主義」である。それは資本主義との完き妥協の精神で一貫され、ブルジョアジーに對する一切の暴力的鬪爭手段やプロレタリア獨裁を原則的に否定し、專ら議會主義による政權獲得を主張する。この一派は口先では穏和な社會主義的綱領を說敎しながら、政府當局者として實現したことは國家資本主義にすぎず、イギリス帝國主義の利益のために殖民地民族の抑壓を容易にはやめない。イギリスの勞働黨の幹部は、勞働者大衆が左翼化し、保守黨ではその不滿を鎭撫し難いときに、ブルジョアジーのために宥め役を買つて出る點に特徴を有してゐる。

フランスでは、小ブルジョアジーの黨として雜然とした分子から構成されてゐる無理論な急進社會黨と並んで、第二インタナショナル時代の「マルクス主義」の系統をひく社會黨がある。この黨が人民戰線の結成以來共産黨と共にフランスにおいて重要な役割を演じてゐることは周知であるが、理論的には國際的に權威を有してゐない。

これに反し、第二インタナショナルの「マルクス主義」として國際的に多大な影響を與へたのはドイツの社會民主主義である。日本社會黨特に舊勞農大衆黨の幹部のイデオロギーは、これと同一範疇に屬してゐる。第二インタナショナルの最大の權威だつたカウツキー(一八五四=一九四?)は、十九世紀末に公然とマルクス主義の「修正」(日和見主義的)を叫んだ修正主義者の一派(ベルンシュタ

イン）との論爭においてマルクス主義を擁護し、農業問題や歴史的研究等において幾多の業績を殘し、マルクス主義の宣傳に多大の寄與をした。だが創造的マルクス主義者でなかつた彼は、マルクスの個個の言葉をドグマ化し、帝國主義時代の新條件にマルクス主義を適用し、發展させることを知らなかつた。かくて第一次世界戰爭は彼とその一派を「社會排外主義者」たらしめ、第二インタナショナルを完全に破綻させ、更にロシヤ大革命は彼をプロレタリアート獨裁の反對者たらしめ、反ソヴェート的反革命的陣營に追ひやつた。今日では彼の最良の時代における「マルクス主義」も眞實のマルクス主義からの逸脫を示してゐることが明瞭にされてゐる。彼の最後の大著「唯物史觀」は自然主義的、機械論的見解とカント主義的傾向の混淆物である。

レーニンが「階級闘爭の承認をプロレタリアート獨裁の承認にまで擴張する者のみがマルクス主義者である」と云つたのは、正にカウツキー等に對して與へた言葉である。カウツキー主義に對するレーニンの批判は痛烈を極め、完膚なき迄にその非マルクス主義的、日和見主義的本質を曝露してゐる。

階級闘爭に關する修正主義と異らないカウツキー的見解（プロレタリア獨裁の否認、「純粋」民主主義の名によるブルジョア民主主義の擁護）が、勞働者階級の闘爭を如何なる途に導くかは容易に理解される。それは政治闘爭を議會主義の途に追ひ込むのみである。

プロレタリアートの實踐に直接關係しない問題にマルクス、エンゲルスや時にはレーニンからさへあれこれの命題を採用しながら、プロレタリア革命＝獨裁の問題に關しては完全にカウツキー主義を

採用する人々の存在の點では、日本も決して例外でない。特にこれは今次戰爭の開始以前に見られた現象である。

社會民主々義の「左翼」に所謂オーストリー・マルクス主義（オットー・バウエル、M・アドレル等）がある。これは理論的にはカント的觀念論を以つてマルクス主義を「基礎づけ」ようとするもので、日本の勞働運動には影響しなかつたが、ブルジョア學者のマルクス主義批判に利用された。

以上が今日の「社會主義」の主要流派である。

第七章　日本における自由主義、社會主義、共産主義

1　日本資本主義とブルジョアジー・地主

日本において資本主義發達のための途が切拓かれたのは、維新政府の樹立（一八六八――「資本論」第一卷が出た翌年）および廢藩置縣（一八七一）による絶對主義國家の成立以來である。幕府を倒壞せしめたものは、マニュファクチュアおよび商業資本の或る程度の發達に基いて、「殖産興業」や商業獨占による封建的搾取の地盤上での資本の原始的蓄積を强行し、それによつて强力な武力を編成しえた西南地方雄藩の實力であつた。有力な高利貸＝商業資本の支持を得た新政府は、各藩の封建的農民搾取權の買收（秩祿＝金祿公債）によつて、全國的規模における單一封建的權力としての絶對主義を確立することができた。かくて絶對主義的官僚政府は農民の封建的搾取の地盤の上に資本の原始的蓄積を强行し、國家資本主義（軍需工業、鐵道、通信機關等）の創出と一般資本主義産業の育成、助長に努力した。

このやうにして最初から國家の庇護下に生長してきた日本ブルジョアジーは、この國家の、從つてまたこの國家によつて育成される資本主義の、土臺を成してゐた封建的農業關係の清算に利益を有しないのみならず、半農奴的農民の貧困のために低廉な勞働力を豐富に利用することができ、人民の購買力の貧弱による國内市場の狹隘を對外進出、大陸侵略によつて補ふべき必然性に迫られた。

他面において、德川時代において領主と農民の間にあつた農民を農奴主的に搾取すると同時に、酒屋、質屋、高利貸、家内工場の經營主等として、資本主義の端初的段階にあつた、地主は、地租改正（金納化――一八七三）、輕減（一八七七）および米價昂騰によつて漸次階級的に成熟した。彼等の中の大なるものは半身をブルジョアたらしめ、他のものもブルジョアジーとの間に何ら本質的な對立を持たなかつた。

明治十年代に戰はれた自由民權運動はこのブルジョアジーと地主が絶對主義的國家機構に參與し、單に經濟的のみならず政治的にも支配する階級たらんとする企圖として發足した。ところで絶對主義的官僚制に對してかけ引きするためには、人民の支持を或る程度まで必要とした。かくして彼等がイギリスの自由主義やルソーの民主主義を人民の間に宣傳したとき、これに誘發されて立上つた農民のブルジョア民主主義は、不統一分散的ながら自由民權運動の現實的推進力となり、急進自由主義者たる自由黨左派はこれに押されたがらこれを利用せざるをえなくされた。だが昂揚せる民主主義が自由主義の手綱のままに動かなくなり、彼等の目標より一層前進しようとしたとき、自由主義者は早くも農民を裏切り、專制政府と妥協した（自由黨解體、憲法）。絶對主義は、自由主義者と合體することに

よつて、プロレタリアートの未成熟の故に確固たる指導勢力を持たなかつた農民的民主主義を孤立させ、無力化した。

このやうに日本の自由主義は最初から民主主義に敵意を示すと共に、半封建的關係に立脚する日本資本主義の特質と、帝國主義時代に入りつつあつた世界史的條件とに制約されて、對外侵略には特別に關心した。ブルジョア・地主政黨の對內的反動性と好戰的軍國主義的本質は、このやうにして日本資本主義の特質そのものに根ざしてゐる。

現在自由主義を標榜してゐる自由黨を見るがよい。その幹部達は昭和初期に於ける治安維法改惡者たる政友會の幹部であり、彼等は田中義一を黨主に押立てて露骨な支那侵略を企てた。また自由黨主鳩山氏が嘗て文部大臣として大學の自由の彈壓者であつた（京大事件）ことも周知である。彼等が戰時中軍部の壓迫の下に沈默してゐたのは、同じ支配階級內の種々のグループ間に見られる本質的ならざる不和、紛爭の一つの現はれにすぎず、彼等が骨の髓までブルジョアであり、ファシストであることに矛盾しない。國體護持、共產主義排擊を看板とする彼等の「自由主義」は、無神論者をトレランス（思想、信教の自由）の原則の適用から除外したロックの自由主義と同樣に、共產主義に對して適用されない「自由主義」（卽ちプロレタリアートおよび勤勞人民に對するファシスト的抑壓）である。もし彼等と同じく帝國主義者＝ファシストであり、彼等と異つて軍閥の戰友であつた進步黨や協同黨の如きが依然として今後も日本の政治的生活を支配するならば、人民は再びファッショ的抑壓の下に苦

しまねばならず、現在聯合國の壓力によつて彼等の意志に反して與へられた人民の自由は、ことごとく陰に陽に無に歸せしめられるであらう。

政治鬪爭の經驗に乏しい後れた都市小ブルジョアジーや農民層を、これらのブルジョア・地主政黨の影響下から離脫せしめることは、民主主義革命の推進のために極めて重要な急務である。

2　民主主義の諸勢力

自由主義者によつてすでに明治十年代に捨てられたブルジョア民主主義は、日淸戰爭（一八九四＝九五）後產業資本主義の確立と共に獨立な階級たることを示し始めた勞働階級によつて取上げられねばならなかつた。明治三十年以降の普通選擧運動と社會主義運動は、基本的且つ客觀的には若いプロレタリアートを主體とするブルジョア民主主義の運動であつた。普選運動は急進自由主義者によつても行はれたが、それは大衆から游離してゐた。然るに當時の社會主義者にあつては、普選はその他の獲得さるべき政治的自由と共に、勞働階級の鬪爭の廣汎な組織的發展のための不可缺な條件として要求され、社會主義のための鬪爭の一環であつた。しかしながら勞働階級のこの政治鬪爭は、三十年代末に土地均分論の形をとつて現はれた農民の民主主義と結びつかず、兩者ともこの結びつきの缺除のために發展しない中に、明治四十三年の「大逆事件」を轉機として窒息狀態に陷つた。

そして第一次世界戰爭末期に、世界資本主義の開始された一般的危機、日本資本主義の獨占資本主

義への轉化、ロシヤ革命の影響等の條件の下で、すでに著しく生長した勞働階級と農民の鬪爭は新たな昂揚を示し、この基礎の上に民主主義および社會主義は新たな力を以て擡頭した。この民主主義は政治的には勞働者、都市中間層、農民を地盤とする普選運動の形をとつた。ところで日本において未解決に殘されてゐたブルジョア民主主義の廣汎な課題（似而非立憲主義の外觀で蔽はれた絶對主義の打倒、封建的農業關係の一掃）から切離された普選は、地主・ブルジョアジーおよびこれと合體せる絶對主義にとつて必ずしも有害ではなく、却てこれによつて一應人民の不滿を緩和し、議會に無緣な勞働階級一部のサンヂカリスト分子に見られた如き「直接行動」主義から平和的な議會主義の途へ、勞働運動を導く可能性も考慮された。これが、ブルジョア黨たる憲政會によつて普選法の實施（大正十四年、一九三五）された所以であり、それと同時に治安維持法が制定された所以である。

だが昂揚せる勞働階級の鬪爭と農民鬪爭は議會主義の狹路に納まりうるものでなく、一九二八年の大彈壓（三・一五事件）の頃までに日本共産黨およびその影響下の勞働者・農民の組織は擴大され、その鬪爭には明確な政治的目標が與へられた。勞働階級のヘゲモニーの下における勞働階級と農民の同盟による、ブルジ・ア民主主義革命の遂行といふことが、その目標であつた。

これと並んで、小ブルジ・アジー、一部勞働者および農民を地盤とする合法的、改良主義的社會民主主義政黨も生れた。それらの政黨は本質上小ブルジ・ア的なものであつて、その右翼派（社會民衆黨）は自由主義的なマクドナルド主義を信條とし、他の大部分（勞農大衆黨——但しこれは「左翼社

會民主主義」ではない）はドイツ社會民主主義に類似のものであつた。だがこれらの政黨（現在日本社會黨へと合同してゐる）も、勞働者のみならず又農民的民主主義に依據し、これを利用せざるをえなかつたことは、當時の左翼社會民主主義者が日本における封建的殘存物との民主主義的鬪爭の意義を過小評價し、特に絶對主義との鬪爭を廻避したにもかかはらず、事實上ブルジョア民主主義が極めて大なる力を以つてその實現を要求してゐることを立證してゐる。

日本社會黨がこのやうに都市中間層のみでなく、勞働階級や農民の一部を地盤としてゐることは、同黨が現在開始されてゐる民主主義革命の有力な擔當者たりうることを示してゐる。この可能性を現實性に轉化するためにはその指導部の一部に見られる自由主義を克服しなければならない。

今や、民主主義變革は進行しつつありとはいへ、それは下から盛り上る人民の力によつて開始されたのではなく、絶對主義機構の最も有力な構成要素を成してゐた軍閥は一掃されても、その兄弟たる官僚は安存し、この官僚と融合せるブルジョア・地主政權および政黨は、聯合軍司令部の命令による殘存絶對主義機構や農村の民主主義的改革を、不徹底に、出來るだけ彼等に有利に、出來るだけ人民の負擔において遂行し、この改革の成果を國の資本主義的發達の新條件たらしめんと努力し、この變革を徹底的たらしめようとする人民大衆に對抗するために國體護持、保守戰線の名において反革命的支配階級の力の結集に極力努め、將來のファシスト支配を準備しようと試みてゐる。

これに對して、民主主義革命を徹底的に遂行し、大衆を飢餓と失業から救ひ、政治的、社會的經濟

的抑壓から解放するためには、革命の最有力な主導力としてのプロレタリアートの黨たる共産黨と、社會黨その他の小ブルジョア的分子との提携、民主主義戰線の結成は決定的に重要である。日本におけるブルジョア民主主義の運命は專ら民主主義戰線の成否に懸つてゐると云つても過言ではないであらう。

共産主義が原則としてプロレタリア獨裁を固持するといふことは、民主主義革命の遂行が問題である場合には、反共産主義的な小ブルジョア黨との提携をも何ら妨げるものではない。小ブルジョア（農民をも含めて）自身、民主主義革命の躓きによつて重大な損失を蒙らざるをえないのである。他面において、共産主義者はいつも、ブルジョア革命から社會主義革命、プロレタリア獨裁への即時轉化を主張するのではない。この轉化には、プロレタリアートの力の準備、一般勤勞大衆との強固な結合が前提として必要であるから、多數人民の支持なくして、その意志に反してこの轉化を暴力的に強行しようとは考へないし、何人もその成功を信じないであらう。大衆に結びつかない少數革命家の暴力蜂起を認めるのは、ブランキ主義であつて共産主義ではない。

新聞出版用紙
割当事務局
28.8.15
綱本

309
NH

自由主義・民主主義
社會主義・共産主義

人民群書

一九四六年五月一〇日　初版發行
一九四八年七月　五日　四版發行

定價　五〇圓

著者　永田廣志
發行者　伊藤長夫
印刷者　東京都中央區銀座三ノ四　佐藤保太郎
發行所　東京都千代田區神田小川町二ノ四　株式會社　伊藤書店
出協會員番號A一〇九〇〇三
振替東京七八一七
電話神田(二)〇二七五

印刷　文祥堂

人民群書

伊豆公夫	青年に愬ふ	品切
永田廣志	自由主義・民主主義 社會主義・共產主義	35円
細川嘉六	世界史の動向と日本	品切
玉城肇	家族制度の歷史	品切
松本愼一	現代世界史の課題	品切
德永直	小說勉强	品切
榊原美文	日本文學史物語	35円
古在由重	思想の進路	品切
新島繁	教育とヒューマニズム	80円
平井潔	友情・戀愛・結婚	80円
中西功	社會民主々義と新民主々義	90円
新日本歌人協會編	人民短歌選集	70円
江森盛彌 詩集	わたしは風に向つて歌う	60円

B6判各90頁——200頁分賣自由

HIIT-57